

みかんの花と花嫁と

湯婆婆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

5年前に両親が離婚し、母親に引き取られたが借金をしていた。借金返済のため家を売ることに…

住む所が無くなった鈴木和馬。

そこで母親の友達であるという高海さんの旅館に居候する事になった。

旅館の3女高海千歌と居候の鈴木和馬の青春ラブコメディ！

目次

本編

# 1	出会いと別れ	1
# 2	不思議な気持ち	6
# 3	内浦紹介!	13
# 4	波乱なお泊まり会♪	21
# 5	お嬢様の嘘	27
# 6	嫌な予感	34
# 7	千歌の嫉妬	40
# 8	ラッキースケベ	49
# 9	ライブ終わりの体育館	56
# 10	特別な体験	65
# 11	GWの予定	74

# 12	俺と私の初デート♡前編	84
# 13	俺と私の初デート♡後編	94
# 14	Aqoursのこれから	105
# 15	Aqoursへようこそ!!	114
# 16	堕天使アイドル!?	125
# 17	りこっぴーの襲来	135
# 18	意外な接点と記憶	149
# 19	記憶	162
# 20	Aqoursからのサプライ	

歌つちく	U A 1 0 0 0 0 記念	番外編	# 2 5	# 2 4	213	# 2 3	# 2 2	# 2 1	ズ
—————	くヤンデレ千		私の想い	喧嘩		千歌ちゃんと呼ばれた日	私の願い	最低で最高な日	—————
243			230	221			201	189	175

本編

#1 出会いと別れ

俺は、鈴木和馬。

5年前に両親が離婚し、母親に引き取られた。

現在時刻は…朝の7時か

母さんはもう仕事行ったか…

「ごめんください〜。」

ん？こんな時間になんだ？

「はいはい。今出ますよ〜」

ガチャと家の扉を開けると、柄の悪い男が3人立っていた。

「いやー。悪いね。お兄ちゃん。お母さんいるかい？」

「いえ、それでは…。」

閉めようとする、手で押さえた。おお、なんか映画みたいだな。関心してる場合じゃないか…。

「お兄ちゃん、閉めないでよ。あの女は何処にいるんだ」

「あの女って、母さんですか？」

「分かってるくせに、生意気な…」

見るからにイライラしている。短気だな。

「母さんに何か？」

「金を返してもらおう！」

だよな…。何となく予想はしていたが、やはりそうだった。

—数時間後—

母さんが帰ってきて、ヤクザとの話し合いが終わった。

結果、母さんは8000万という大金を借金していた。

「和馬…ごめんね…」

最悪だ。今こんな状態で謝って欲しくなかった。

「別に…」

母さんは借金返済のため、一日中働くことが決まった。

あのヤクザ達の所で…

心配だ。それが1番の感想だ。

この家も売るそうだな。

えっ？今更気がついた。

俺、住む所ない…

この年でニートか…

「和馬、あのね私の友達に高海さんっていう旅館を経営している人がいるんだけど…」

なるほど、俺はそこへ行けてことか

「ああ。分かった。」

どうせ、近いだろう。埼玉とかかな？

そんな甘いことを考えていた。

「内浦っていう所よ」

うち…なんだって？内浦？どこだよ？

「静岡県にあるんだけど…」

「はいはい。」

「今日中に荷物をまとめて行きなさい。」

マジか。今日って今日だよな…

—午後—

「じゃあ、行くわ。」

「気をつけてね。今までありがとう。」

「こちらこそ」

これが鈴木家の最後の言葉となった。

3時間で沼津に着いた。

えつと……この辺に車が来てるはず……

あつ。あつた。

「こんばんは。これからお世話になります。」

「和馬君ね♪こちらこそ！」

優しそうな女の人だ。

「あの……母がお世話になってます。」

「ふふ。」なんで今笑った？おかしなこと言ったか？

「私は、娘よ。お母さんが友達なの……」

ああ。なるほど。

「すみません。」

「いいのよ。よく言われるわ。」

車内からは月に照らされた海が見える。

どんなことが俺を待っているのだろうか？
楽しみである。

ここから、俺の新しい生活が始まるんだ！

#2 不思議な気持ち

—沼津駅から20分—

「和馬君〜！着いたよ〜」

一緒に車に乗っていたお姉さんが俺を起こす。

って!?俺寝てたの？マジか…

「すみません。起こしてくれてありがとうございます。」

車を降りると立派な旅館が建っていた。

凄く綺麗だ。なんというかここだけ時間が止まっているような…そんな感じ…

「はい。じゃあ自己紹介するね♪私はここの長女で高海志満よ。よろしくね♪それで

こっちがお母さんの…」

「高海千恵子です。あなたのお母さんの美沙子の友達よ」

「どうも…こちらこそお世話になります！」

「はい！私は高海千歌！ここの3女だよ♪高校2年生」

高校2年生ってことは俺の1個下か…

身長差からか、上目遣いになっているのも彼女の魅力だと思う。というかものすごく

可愛い。

「よろしくお願ひします。」

「だだいまゝ」もう一人の女の人が帰ってきた。

「どうも、鈴木「あつ。思い出した！和馬だろ！あたしは高海美渡！」

なんかこの三姉妹皆性格が全然違う。

なにはともあれ、帰る家があつて良かった。

ひと安心だ。

「じゃあ、和くんのお部屋に案内するね」

「ああ。よろしく。」

あれ？今サラッと俺のことと和くんって呼んだ？

和くんなんて呼ばれたのいつぶりだっけ？

「はい。とうちやーく！ここだよ。私の隣の部屋！覚えやすいでしょ？」

にこにこしながら言うから自然とこちらも笑顔になる。

つて違うだろ！えっ!?!『私の隣の部屋!?!』

いやいやいや・・・年頃の男と女の部屋が隣つて・・・大丈夫なの？

「ん？和くん、どうしたの？・・・もしかして、私の部屋の隣は嫌だった？」

凄く泣きそうなりながら、上目遣いで訴える。

ずるいだろ…。それは…

「いや、何かわからない時は部屋訪ねていいかな？」

何言っているんだ！俺く！！

「良かった♪じゃあ、また明日ね？おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

ふうー。なんかいい感じに話せたんじゃないか？

女の子と話す耐性がない俺にしてはいい感じだと思う。

それにあんな誰もが羨ましく思う美少女とだ。

コンコンコン…

控えめに襖が叩かれた。

「はーい。」

誰だろう？ノックを鳴らしてくれるなんて優しい人だ。

襖の前に居た人は、千歌だった。

「ごめんね。寝てた？」

「ううん。大丈夫。どうしたの？」

「あのね…。明日なんだけど…」

明日?なんかあつたけ?

「お母さんに内浦について教えてあげなさいって言われてて… そのついでに私の幼馴染も紹介したいなあって思つて」

千歌の幼馴染か… さぞかし可愛いのだろう…

「ああ。分かつた。よろしくな。」

名残惜しいが、この辺でもう寝ないといけない。

夜遅くに2人で話していると良からぬ噂がたつてしまうかもしれないからだ。俺は別にいいけど、千歌は嫌だろう…

「じゃあ… お「ねえ!」」

おやすみそう言おうとした時、千歌が言葉を遮つた。

「あ、ごめんね。遮つちやつて… なあに?」

「いや、千歌が先に…」

まずい。この状況はとも… これはカップルがよくやるあれではないか。

「じゃあ私が言うね?あのね… ふ、べ、ん… だから… えて」

「えっ?ごめん。今なんて?」

「だから!不便だから連絡先教えて」

ああ。なんだ。そんなことか。連絡先ね。連絡先…

きっと、今日の彼女との距離が近かったからだろう。

今日会ったのが初めてなのに…

おかしい…こんな気持ちになるなんて…

〈千歌's story〉

和くと連絡先を交換した後、素っ気なく別れてしまった。顔が思ったよりちかくにあつて驚いた。

そこから意識したら意識しただけぎこちなくなつてしまった。彼ともつともつと話したい。そう思うのは何故だろう？ 今日会つてからずっと考えていた。

用もないのに、部屋に行ったり、必要以上に話したり…

今も凄く後悔している。もつと愛想よく振る舞えていたら…

もつとにここに出来たなら…

どうしてこんな気持ちになるんだろう？

初めて会ったばかりなのに……
なんで……なんで……

明日は今日よりも頑張らないと
いっぱいいっぱい話しかける！
そう決めた。

#3 内浦紹介!

—現在の時刻は8時30分—

ふあゝ。眠っ! 昨日、千歌ときこちなく別れてしまつてあまり眠れなかった。

よし! もうひと眠りするか。

ドタドタドタ

誰かが廊下を歩いてくる? というか走ってくる音がする。

うん? 俺の部屋の前で止まった?

バーンともものすごい音がして襖が開いた。

「和くん〜! 和くん!!」

あゝ。千歌か……。ん? えええええ千歌!?

昨日の千歌とは雰囲気違った。

まさか……。昨日のは……。夢? いや携帯に入っている千歌の連絡先が現実だと証明し

ている。

今日なんかあったけ?

「和くん!! 起きてー!ー! 内浦案内するって約束したでしょ!」

もうっ!と言いなからテキパキと支度をする。

いや、でも千歌も今起きただろ。

だつてパジャマだし…

「じゃあ早く着替えちゃつてね♪」

行つてしまった。どうして元通りなんだ?

でも気にしてなさそうで何よりだ。

俺も気にせずに行こう。

—10分後—

支度が終わった俺は遅い朝ご飯を食べていた。

千歌達は毎日こんなに上手い飯食べてんのか?

旅館だけあつて文句なしだ。

「ねえ。和馬君。千歌ちゃんとなんかあつた?」

えっ!?!志満さん鋭すぎつす…

「あつ。いや…まあ…」

どうかこんなはぐらかし方で誤魔化せますように…

普段、神様なんて信じないがこの時はいて欲しかった。

だってなんて言えばいいか分からないだろ…:

喧嘩?でも無いし…:

「ふ〜ん… あつたんだ。」

志満さん意外とSっ気ある?

1つ訂正しておこう。俺はMじゃない…: 絶対に!

「和くん〜〜ごめんね。お待たせ〜♪」

ありがとう!千歌〜!ナイスタイミングだ。

ん?ちよつと待て。千歌の格好がヤバイ。ヤバすぎる。

語彙力がない俺はヤバイしか言えないがあえていうと俺の心にホームラン状態だ。

白いワンピースに薄いピンクのカーディガンという何とも春らしい格好だ。千歌がこんな可愛らしい格好を做的是少し意外だった。最初見た時から元気とか明るいか似合う女の子だと思っていた。だからてつきりシヨートパンツとかデニムを着ると思った。いや、こつちの方がいい。

「和くん〜!どうしたの?鼻血出てるよ?大丈夫?」

えっ!?!はな、鼻血!?

うわあ〜。やらかした。いくら千歌の格好がドストライクだったからといって鼻血

を出すなんて、最低過ぎる。

「大丈夫。大丈夫。：はははは」

素っ気なく笑うことしか出来ない自分が情けなかった。

「そう?じゃあ気を取り直して行こう!」

いつてきまーす!と元気に志満さんに言つて外へ出た。

「はーい!ここが伊豆三津シーパラダイスだよ!通称みとしー。これが1つめの水族館ね♪」

ん?1つめの?いや、聞き間違いか。：こんなに田舎に水族館がいくつもある訳がないからな。

「じゃあ次!この坂を登っていくと私の学校があるんだ。ここからは遠いからまた今度ね♪」

「おう。分かった。ちなみに遠いつてどのくらい?」

「うーん。バスで10分。そこから坂登つて。：」

ちよつと興味本位で聞いたらすごい回答が返ってきた。

「そうか。分かった。分かったから。」

確かにここら辺何にもないからな。そのくらいか。

「それでは、お待たせしました！和くん！あわしま行くよ！さあさあ船乗って！」

えっ!?!船?あわしまって何?どこ?!

「あわしま着いたら、もう少し詳しく教えるからね」

あわしま?へは5分くらいで着いた。

船を降りると...えっ!?!イルカだよな...

というか水族館!?だからか、さつき1つめのと saying いたのは...これが2つめ...

なんで?2つもいる?!

「あ、えつと...ここが2つめの水族館のあわしまマリナーパークだよ!これはイルカプールなの!ああ!跳ねた!可愛い♡」

いや、お前の方が可愛いよ。なんてな。はははは...言える理由がないだろ!

「本当だ。可愛いな。それでお待たせしましたって?」

さつき船乗る時に言っていたことが気になったから聞いてみた。千歌はハツとなつて

「あ、そうそう!忘れてた。あははは...」

「千歌(ちゃん)〜」

2人の声が聞こえて来た。

「あつ。果南ちゃん! 曜ちゃん!」

「もしかして和馬? 私は千歌の幼馴染の松浦果南! よろしくね♪」高く結んであるポニーテールが揺れる。

「果南ちゃんはね、私の1つ上で何でもやってくれるもう1人のお姉ちゃんなんだ〜!」
千歌はにこにこして話している。きつと凄く大好きなんだろうな。そんな気持ち传达わってきた。

「あつ。私も!! 私は渡辺曜! 私も千歌ちゃんの幼馴染だよ! よろしくね♪和!」

アールグレイの髪が風に吹かれる。それにしても『和』か…

久しぶりに呼ばれた気がする。

「曜ちゃんは、千歌と同じ年で気が合うんだ〜! 曜ちゃん大好き♡」

そう言いながら千歌は抱きついた。

「千歌ちゃん、いきなり抱きついたら危ないよ?」

「えへへー。ごめんね。」

この3人は本当に仲がいいんだな。そう思った。

「じゃあ、果南、曜、これからよろしくな!」

「うん!」「ねえ、千歌は?」

「ああ、うん。千歌もな!」

初めて千歌をいじつた。なんだろう?俺はあんまり人と関わったりいじつたりしないのにな…

それからお昼を食べながら、色々な話をした。

あまりに楽しくて時間を忘れていた。それがいけなかったんだ。皆忘れてたんだ。あわしまは船じゃないと来れない。孤島だということを…

気がついたのは意外にも千歌だった。

「ああー!船の最終便があああー!」

「えっ!?うわあー!本当だ。」

「どうすんだよ?家帰れないじゃんか!」

家つて言つても居候だから自分ではないが…

「大丈夫!大丈夫だよ!」

果南だけは冷静だった。その言葉で2人も落ち着いた。

「そうだね。」「果南ちゃんいたね♪」

えっ!?えっ!?どういう事?俺だけ理解していなかった。当たり前だ。だってこんな所に住んでいるなんて、誰が予測出来るのだ!

「私の家に泊まればいいんだよ♪」
ああく。今夜も寝れない夜になりそうだ。

#4 波乱なお泊まり会♪

「和くん!.....一緒に...寝よ?」

は? いやいやいや。おかしいだろ!

「千歌ちゃん! 待って! 和は私と寝るの!」

うんうん。曜、千歌を止めてくれてありがとう。 って!? ええええええ!

「2人共、落ち着いて! 今日、誰のおかげでここに泊まれると思ってるの? ん? だから私が和馬と寝るの!」

は? 3人はさつきから何言ってるんだ? しかもなんか果南は脅しがかかってない?

怖いわ!!

ていうかどうしてこうなった? 思い返せばあれは... 船の最終便が終わった後

果南が自分の家に泊まればいいと言った後の事

「いや、俺は泊まらないよ!」 全力で断った。だが...

「じゃあ、どうするの？もう船無いんだよ？」

果南に痛いところをつかれた。

「泳いで帰るの？果南ちゃんじゃあるまいし……」

「そーだよ！ここに泊まろうよ！ね！ね！」

確かに泳いで帰るのは無理そうだ。じゃあどうする？

もう……なるようになれ！

「分かった。果南、じゃあお邪魔します！」

「はい！」

それからご飯を貰い、3人でわいわいしながら食べた。

うん。ここまで変な所はない。

食べ終わった後、俺は食器を洗い3人は風呂に入った。

その後、事件は起きた。寝支度があるため、寝る場所を決めなければならなかった。

そして現在に至る。

「分かった。とりあえず3人共、落ち着け！俺はお前達とは寝ない！絶対に！だから、果南！1人部屋を用意してくれ！」

「「ええええええ」」

「なんで！」「一緒に寝ようよ！」「ごめんね。それは無理。だって家は狭いから使える部

屋は2つしかないし、その部屋も狭いから2人しか寝れないの！」

ああ。なるほど！って！いや、それでも駄目だろ！

別に俺は何もしないけどいくら何でも不用心過ぎる。

これで俺がもし悪いやつだったらどうすんだよ？

「じゃあ。このリビングは？」「リビング？」「千歌ちゃん、どういう事？」

「せっかく4人もいるんだし、皆でここに布団を敷いて寝るの！そうすれば喧嘩にもならないし……いいでしょ？」

「そうだね♪」「流石！旅館の娘！」「えへへー」

「和くんはどう？」「こんなに俺が嫌がるから色々考えて貰ったんだ。よし！覚悟を決めろ！鈴木和馬！」

「分かった。それならいいぞ！」「良くはないけど……」

「「やった〜！」」

3人が喜んでくれて良かった。

だが、ここからが戦争だった。

俺が風呂からあがると布団が綺麗に敷いてあった。

「あつ。和くん〜！今ね。果南ちゃんが髪の毛乾かしてくれるんだって！」「ほら！千歌

！大人しくしてて」

「果南に乾かしてもらうの久しぶりだなあ〜」「いいなあ〜。次は私ね♪」「はいはい。ちよつと待つててね！」

これが女子のお泊まり会というものか…:

皆お風呂あがりだからか色っぽい。

俺はここにいていいのか？

「和馬もやってあげよつか？」

「えっ!？」

俺は本当に男だと思われてないのか？なんだか悲しくなってくる。

「ふふ。冗談だよ！和馬、真に受けすぎ！」

なんだよ！全く！俺はいつからこの子達のいじられキャラになったんだか…:

でもなんだか本当に3人といると楽しい！

それに心から笑える。

ここに来て良かった。

「はーい！千歌！曜！和馬！寝るよ〜♪」

果南の掛け声で皆布団に入る。

順番は右から曜、果南、千歌、俺。

本当は真ん中だったが、嫌がったので果南が代わってくれた。千歌と曜は不満そうだったが……

仕方がないか。まだ俺には耐性が無いんだから……

「じゃあ、寝よつか！おやすみ♪」

「おやすみ〜！」「おやすみなさい！」

これでやつと少しは寝れる。そう思ったんだ。だけど……

「うう〜ん…………… かなん…………… ちゃん…………… Zzzz」

千歌が俺に向かって思いつきりハグしてきた。

果南と勘違いしたみたいだ。

「おーい！千歌！果南じゃないぞ！俺だよ！和馬！」

可哀想だが、揺すり起こす。ちよつと待て！

こいつ、ブラしてない!?

本当にこの子大丈夫？

くそ！揺すり起こせなくなつた。朝までこのまま？

それはいくら何でもまずいよな。曜と果南に勘違いされては千歌が可哀想だ。どうする？俺！

「ううゝ……あれえゝ和くん？……えっ!?和くん!?うわあああ！えっ？えっ!?……とりあえずごめんね？」

目が覚めた千歌がきちんと謝ってくる。なんていい子だ。

「いや、大丈夫！ええつと……その……気持ち良かった……よ？」

何言ってるんだ……俺……!

「もう／＼／和くんのばーか／＼／」

照れながら、俺の肩を叩く。でも全然痛くはなくて……

「ごめん。ごめんってばー！」

「もう知らない!……ぷっ！あはははっ」

2人でどこからともなく笑いだした。

良かった。千歌との距離が離れなくて……

2人の笑い声が大きくて寝ていた果南と曜に怒られたのは別の話。

#5 お嬢様の嘘

— 果南の家に泊まった次の日 —

「おはよー!」

いつものように千歌が起こしに来た。

「おはよう。千歌。」

ここまで聞いてるともうカップルみたいじゃないか……

「それで、今日もどこかへ行くのか?」

大体俺を起こす時はそうだろう。

「ううん。今日は全然終わってない春休みの宿題を手伝ってもらおうと思って……え

へへー」

えへへーじゃないし……そうか。遊び過ぎて忘れてたがもうすぐ学校だよな……

俺も何もやってないな……ん? つか俺行く学校決まってるじゃない!

どうするんだ? ああ。もう! 色々あつて忘れてた。

「おーい! どうしたの? 和くん〜!」

「あ、ああ。あのさあ、この辺ってどこに学校あるの?」

「ん？なんでそんなこと聞くの？まあ、いいや。えつと…内浦には1個だよ。沼津に行けば結構あるけど…」

内浦には1個!?今、千歌当たり前のように言つたよな？

「ちなみにその内浦の学校つて…共学？」

これで女子校とか言うなよ…

「えつ？うーんと…形としては女子校だけど…」

マジか…ん？形としては…つて言つたか？

「形としてはつて？」

最後の俺の希望！お願いします！

「よく分かんないけど、理事長の推薦とか？今から、果南ちゃんと曜ちゃん来るからその時間いてみて！」

そうか…理事長ね…知り合いな理由がない。

そんな偉そうな人。

てかまた果南と曜、来んのかい！

仲いいな。本当に。

「ちーかちゃんー！」「千歌ー！」

「あつ！来た来た！はーい！ちよつと待つてね〜♪」

「いらつしやい！」「よっ！果南、曜！」

「そつか… 和馬いるんだったね」

忘れてたよ。と笑う果南。

全く失礼過ぎだよ。3人共…

それから… ここは千歌の部屋

テーブルを2つ出して勉強？おしゃべりをしている。

具体的には、俺の事だ。

「それで、和馬は行く学校がないと…。」

「ああ。恥ずかしながら…」

「浦の星でいいじゃん！」「駄目だよ！曜！だってあそこは形としては女子校だから。」

また出たよ。”形としては”

「「「んーんーん」」」

p r r . . . p r r . . .

果南の電話が鳴った。

「ちよつとごめんね。」

「いいよ♪ここでも出て…」「千歌ちゃん、流石にここは… プライバシーとかあるだろうし…」

流石、曜だ。気を配る。それに対して… 千歌は

「そう?」なんて… 全く… まあ。千歌らしいが…

「鞠莉から?」ここでも出てもいいや」

ええええええええ! 果南さん?

「もしもし? 鞠莉?」

『Hello♪果南!』

「どうしたの? 電話なんて…」

『ごめんなさいね。びっくりした?』

「用が無いなら切るよ?」

『ああ〜! 待って! 果南、大事な話があるの…』

「えっ!?! 鞠莉が?」

『失礼よ!』

「あはは♪ごめんね。何?」

『今度の新入生歓迎会にパパが来るの!』

「だから? それ、私に関係ある?」

『あるの! 私... パパに...』

「嘘付いたでしょ?」

『うん...』

「それで? どんな嘘?」

『果南とダイヤと後輩とスクールアイドルやってるって』

「えっ!? スクールアイドル!」

『だって、廃校にするって言うから...』

「そんな... 分かった。とりあえず切るよ?」

『果南...!』

「じゃあね〜」

「今の聞いてたよね? あはは... どうしよう?」

「あのさあ、鞠莉さんって理事長だったよね？」

「うん。そうだけど……」

「そうなの？高校生だよね？」

「お嬢様か……俺とは一生無縁だな……」

「私と曜ちゃんもやるから、和くん入れてもらえないかなあ？」

「「ええええええ」あつ。曜とハモった。」

「だって千歌ちゃん！スクールアイドルだよ！やったことないじゃん！それに新入生歓迎会は2週間後だよ！」

「そうだね。でもやるしか無いんだよ！だって廃校になっちゃうから……」

「廃校か……千歌は浦の星が好きなんだな……でも……」

「ちよつと待って！俺が浦の星じゃなくて沼津の学校に行けばいいだろ？」

「でも、鞠莉さんも果南ちゃんも困ってるし……」

「それはそうなんだけど……」

「分かった！私やるよ！千歌ちゃん！果南ちゃん！」

「「曜（ちゃん）」」

「え？えつ?! やつちやうの？曜？まあ、あんな事言われたらな……」

「じゃあ連絡するね？」

こうして、俺の入学と引き換えにお嬢様の嘘を本当にするようになった。

6 嫌な予感

俺達（千歌、曜、果南）は何故かあわしまホテルに来ていた。何故？

「うわあー！凄いい！凄いいよ！和くん!!」

千歌が、俺の腕を揺らしてくる。

「おおう。そうだな。」

「やっぱ、ここ昔から思うけど、凄いな。これだから金持ちは……」

果南は呆れたように言う。ん？昔から”って言ったか？言ったよな!!

「あの…… 果南……」 「あ……」 「果南……」

誰かに言葉を遮られた。飛んできたのは、金髪のやんちゃそうなお姉さん。てか後ろの黒いヤツ、あれSPってやつだよな？現実にも本当にいるのか！

「鞠莉!! あつ！紹介するね！こちらは小原鞠莉！」

「シャイニー♪マリーって呼んでね？」

「こら！鞠莉の嘘に手伝ってくれるんだから、感謝を示さなきゃ！」

「Sorry！」

意外と果南が一番偉い？というか誰も逆らえない感じか……

「あつ！私は高海千歌です！果南ちゃんの幼馴染です！よろしくお願いします♪鞠莉さん」

「んもう！だからマリーだってば！よろしくね！千歌っち♪」

「私は渡辺曜です！私も果南ちゃんと幼馴染です♪よろしくお願いします！ヨーソロー♪」

「よろしくね！曜！」

千歌は千歌っちで曜は曜なのか……………この人本当に謎すぎる。

それにしても、この謎オーラと雰囲気……………

どこかで感じた事あるような……………

「俺は鈴木和……………」思い出したわ！和よね？鈴木和馬！」

ああ。やっぱり会ったことあった。

俺がまだ小さかった時……………

「パパママ……………」ヒグッ……………どここ〜」

1人の女の子が泣いている。それにも関わらず大人は見て見ぬふりをしている。

「全く……………」仕方がないな……………」

俺はきつと同じ歳くらいの子の女の子の所へ行つた。

「おい！何してんだよ？迷子か？」

俺は昔から口が悪かった。今思えばもつと優しく声掛けろと思うわけだが……昔の俺はそれがかっこいいと思つてたらしい……

「違うもん。迷子じゃないもん！パパとママが居なくなっちゃっただけだもん！」
「それを迷子つて言うんだよ！」

この時の鞠莉はすごく意地を張っていた。なんでだ？
今でも分からない。謎である。

結局、東京の街を2人で駆けずり回った。
そして、鞠莉の親を見つけた。

「おう！鞠莉！久しぶり！また会えて嬉しいよ！」

いやあく。世の中つてやっぱ狭いな。まさかの再会があるなんて……
ん？俺の袖口が重い？というか引つ張られてる？

「和くん？………ムウ………」

千歌だった。上目遣い&ほっぺぷくくとか鼻血出るレベルでヤバい。無自覚か？てかなんで千歌はふてくされてるんだ？分からないことが多すぎる。

「あら？千歌つちと和つてそういう関係だったの？ごめんなさいね。千歌つち？」

ほら！見てみる！鞠莉に誤解されたら！まあ、俺はいいんだけど……………

「ほらほら！鞠莉！本題！」

果南、ナイスだ！ありがとう！これから沈黙になって気まづくなる所だった。

「パパに廃校にするって言われて、嫌だって言ったら、じゃあ何とか出来んのか？って言われてそれでスクールアイドルって言っちゃったの……………ごめんさい。」

「鞠莉さん。ううん。鞠莉ちゃん！千歌も頑張るから、一緒に頑張ろう！ね？」

千歌が珍しく本気モードの様だ。ん？珍しく？なんで俺は珍しくなんて思ったのだろうか。この間会ったばかりなのに……………

「うん！千歌ちゃんの言う通りだね！一度決めたんだからやり遂げるまで諦めないよ！

鞠莉ちゃんと一緒に！ヨーソロー!!」

「千歌っち……………曜……………ありがとう！やりましょう！」

やっと鞠莉の決意が固まった。その時、コンコンと部屋のドアがノックされた。

「鞠莉さん！これはどういうことですか？」

そこには黒髪の the 大和撫子な女の子がいた。しかも激おこで。折角の美人さんなのにもつたいない。

「oh！ダイヤ！こんな所で偶然ね♪」

「ふざけてるんですの?」

「まあまあ。落ち着いて2人共。ダイヤは後輩に挨拶!」

鞠莉とダイヤさんってケンカするほど仲がいいってやつ?

その間に立つのが果南なのか。だから果南には逆らえないと……

「コホン。私は黒澤ダイヤですわ! 浦の星女学院の生徒会長です。よろしくお願ひしますわ!」

生徒会長か…… 何とも彼女らしいな。

こうして2回目の自己紹介が終わった。って! 違うだろ! これが目的じゃなくて! スクールアイドルだわ!

「はっ! 鞠莉さん新入生歓迎会のことですが……」

「ああくん! 話戻されちゃった!」

この5人大丈夫だよな? 色々心配になってきた。

でも何よりも皆仲良くなってくれて良かった。

嫌だと言いながら誰よりも動くダイヤ、喧嘩してたら間に入って収める果南、少し変だけど悪気はない、根はいい子な鞠莉、制服オタクだけどフレンドリーな曜、自分では普通と言いながらも笑顔の絶えない千歌。

皆ちゃんといい所のある、いい子だ。俺が言うから間違いない!

「あつ！和くん！和くんは私達に助けて貰うんだから…… マネージャやって！」
助けて貰うんだからお礼は何かしようと思っていた。だがマネージャって……
嫌な訳じゃないんだけど……

” なんか嫌な予感がする ”

#7 千歌の嫉妬

1. 2. 3. 4. . .

果南がリズムを取る。体力がある曜は果南に付いてきてるが、ダイヤ、鞠莉、千歌は...

「ちよつと！ちよつと！3人共どうしたの？」

「か、果南さん？ちよつと休憩... 「あまーい!!!」

「[[[[うわあ!]]]]」

「ちよつと！どうしちゃったの？ん？あと1週間しかないんだよ!!」

確かに果南の言う通りだ。目標の新入生歓迎会はあと1週間後に迫っている。

だけど... これでは本番が来る前に誰かが倒れてしまう...

「確かに、果南の言う通りだ。だけど果南... このまま練習していると誰か本当に倒れるぞー！」

マネジャーの俺はこんなことしか言えないが...

「うん。分かった。じゃあ休憩ね？」

「[[[[わーい!!]]]]」

休憩時間、俺は果南を呼び出した。

「おい。果南どうした？なんかお前変だぞ！」

「別に和馬には関係ないでしょ……」

果南は何かを堪えるように言った。

「そうだな。俺には関係ない。だけど何を焦ってる？それを教えてくれ！皆変だって気づいてるぞー！」

「えっ!?……ごめん。私、この学校無くなっちゃうのかなって思ったたら焦っちゃって……」

涙をポロポロ流しながら、果南は胸の内を明かしてくれた。その果南の頭を撫でながら言う。

「よしよし。でも、廃校にならないように鞠莉の嘘を本当にするんだろう？」

「……ひぐつ……うん……ありがとう……和馬！」

元気になって良かった。

パチパチパチ

ん？なんだ？はあ…… 全く……

「何してだよ…… 曜、ダイヤ、鞠莉、千歌！」

「いやあく。感動の瞬間でしたから…… あははっ！」

たつく。曜は……

「私は駄目と言ったのですよ？でも……」

「ここに居るだからダイヤも同罪よ♪」

「まあまあ。鞠莉ちゃん、ダイヤさんいいじゃないですか？果南ちゃんのかな所なか

なか見れませんか？」

「そうね♪ちかちか？どうしたの？」

「ふえ？ううん。何でも無い……」

「そう？ならいいんだけど……」

千歌はどうしたんだ？

「千歌？大丈夫か？」

「うん！私、トイレ行ってくる!!」

「あっ！待ってよ！千歌ちゃん〜！」

なんだ？

それから俺は、千歌と曜を探しに来ていた。

「あ、あの……」

すると、大人しそうな少女が声を掛けてきた。

「は、はい。俺？」

「は、はい。あの……ここ女子校ですよ？」

ああ。不審者扱いか……

「そうですね。俺はこのスクールアイドルのマネジャーをやることになってるんです。」

「そ、そうでしたか……」

まだ怪しんでるか…… 確かにそうだよな。

俺は今千歌と曜を探しに女子トイレの周りを観ているんだから傍から見れば不審者だろう。

「和〜!ちかつちが見つかつたわ……よ?」

「本当か?良かった……」

「ねえ……まさか……ちかつち見つけずにこの子と喋つてたなんて言わないわよね?」

「え?ああ〜。この子に俺、怪しまれちゃつて……」

「ああ〜。そう……まあいいわ。じゃあ、和は貰つてくわね〜♪」

なんか、鞠莉の様子がおかしい気がするんだが……

千歌も……2人共どうしたのだろう?

—千歌, s t o r y—

ああ〜。逃げて来ちゃつた……。

屋上にいた時、和君と果南ちゃんがいい雰囲気だった。

まるで彼氏と彼女みたいだった。泣いてる彼女を慰める。きつと2人に言ったら『違う』と答えるだろう。

でも私にはそう見えた。

なんでかな？その時、私の胸がチクチク傷んだ。

「千歌ちゃん〜！」

曜ちゃんの声が聴こえてきた。なんで？

「千歌ちゃん！どうしたの？」

うう。曜、ちゃん……………」

曜ちゃんの声聴いたら涙が出てきた。

「曜、ちゃん…………… うううう……………」

「千歌ちゃん、大丈夫だよ？何があつたか教えてくれない？誰にも言わないから。私と

千歌ちゃんだけの秘密♪」

曜ちゃんはやっぱり優しいな。

「曜ちゃん、あのね…………… 私……………」

曜ちゃんに全て話すと、曜ちゃんは…

「あつははは。千歌ちゃん！それは… 果南ちゃんに嫉妬してるんだよ♪この… の… 可愛いなあ♪もう！」

「ち、違うよ。だって…」

「だって？」

「だって和君は果南ちゃんが好きなんでしょ？」

「えっ!?! そうだったの?」

「ううん。なんとなく。」

「絶対そうだと思う。だって、千歌は『普通』なんだよ? 普通怪獣』なんだよ? 曜ちゃん。」

「ふーん。まあいいや。千歌ちゃん、戻ろ?」

「ううん。嫌だ。」

今、和君の前に帰ったら泣いちゃうもん。

どうして和君にはこの気持ちが伝わらないの?

もう! 和君の分からずや!!

「ちかっちゅー！マリーよー♪」

鞠莉ちゃん…ごめんね。今は出たくないよ…

「あら？ちかっちは果南に嫉妬ファイヤーなんでしょ？」

「な、なんで知ってるの?!」

「うふふ。そうなんだ。なんとなく知ってたけど…」

しまった。策略に乗せられた。悔しい〜!!

「ちかっちゅー！いい提案があるけど…聞く？」

「う、うん。一応…」

「私達だからマリー、曜、ダイヤ、もちろん果南もちかっちを応援するわ！どう？」

「どうするの？それに果南ちゃんは…」

「あら！本当に嫉妬ファイヤーなのね…」

「う、うるさい／＼／」

「あつ！千歌ちゃん照れた！」

「照れてないもん／＼／＼」

「うふふ。可愛い。和の情報私達が聞き出してあげる。それが提案よ♪どう?」
「お、お願いします…。ありがとう♪」

鞠莉ちゃんのおかげで果南ちゃんとも仲直りが出来たの！
仲直りっていつでも、私が勝手に嫉妬したただけなんだけど…

ありがとう♪鞠莉ちゃん♡

#8 ラツキースケベ

今日はいよいよライブだ。

この1週間、色々あった。まず、グループ名決め。それから作詞と作曲、衣装作り……

めちやくちや大変だった。

だがどれも満足する物が出来た。俺は忘れていたのかも知れない。こうやって皆で協力して1つの物をやり遂げる達成感を…… 思い出させてくれてありがとう。A q
oursの皆……

あぁー。マネジャーの俺まで緊張してきた。

「い、いよいよだね。」

「千歌、緊張し過ぎ……」

「あっははは！ 気楽に行こうよ♪千歌ちゃん？」

ライブまであと1時間を過ぎた。千歌達A q o u r sは衣装に着替えながら話していた。

「それにしても、あと1時間後にはステージの上なんですわね…。なんだか、実感が湧きませんわ…。」

「そうだね。でもダイヤがそんなだと新入生不安になっちゃうよ？笑って！笑って！」

「ちよつとやめて下さる？」

彼女達は忘れていた。自分達は衣装に着替えながら話していたことを……………

「おーい！話してるとこ悪いんだ…。け…。ど？」

「「「「うわぁー「「「「「」」」」」」

—20分後—

「和君？…：…せ・い・ぎ！！」

「はあああい！ごめんなさい……」

「全く……いつも家でも言ってるよね？入る時は……」

「ノックですよね……」

「分かってんじゃない!!全くもうだよ!全くもう!!」

本当に反省している。でもまさかあんなに騒ぎながら着替えてるとは思わなかった。

もしかしてこれって……ラッキースケベって言うやつ？

俺がまさか体験するなんて……神様ありがとう!!

それから、千歌が「いつも家でも言ってるよね？」と言ったのは、あれは千歌がちょうど着替え終わってたんだよな……

残念だったな……

「おーい！聞いているの？和君〜？」

「おお。なんだ？」

「もう。だから……本当に……見たの？／／／」

「ええ!?!千歌、そこまで聞く？」

「もーう！はやく言つてよ!どうなの?」

「いや、まあ。本当にごめんなさい。」

「ああああああ!!和君に見られた!!もう千歌お嫁に行けない……………」

そんな!?見たただけぞ!ちよつとだけ!

そんなに俺嫌われてんの?

「あははつ。じゃあさ!和馬に貰ってもらえば?」

「なつ///」

「そうね!それがいいわよ♪それにしなさいちかっち♪」

「おお!千歌ちゃんが和のお嫁さんか…いいね!」

「鞠莉ちゃんと曜ちゃんまで…」

いや、待つて待つて!話についていけないし、おれに拒否権無いし…まあ。嫌じゃ

ないけど…むしろそれがいいけど…

それに千歌が満更でもなさそうなんだが…

「千歌!準備終わったよ!」

今回、ライブをするにあたって色々準備してくれたむつ達が来た。

「あつ!うん!むつちゃん、ありがとう!!」

さあ。ライブ本番だ。

「なんか、和君と話したらあつという間に1時間経っちゃったよ。良かった……のかな？」

「緊張ほぐれただろ？」

「まあね……。あつ！さっきの忘れてないからね！」

「あー。はいはい。千歌！」

「ん？なあに？」

「頑張れよ！応援してる。大丈夫だよ。あんだけ練習したんだから……」

「うん!!ありがとう!!」

こうして、新入生歓迎会でのライブが始まった。

—千歌's story—

和君が応援してるって言うてくれてすごく嬉しかった。

今日は鞠莉ちゃんの為でもあるけど、和君にいいところ魅せるんだ!!

「千歌!!大丈夫?」

「うん!頑張ろうね!」

「ヨーソロー!!」

「当然ですわ!」

「皆、ありがとう。私の嘘に付き合ってくれて…」

鞠莉ちゃんが涙目になりながら、私達に感謝を伝えてくれた。

「鞠莉!泣いちやダメ!これからライブだよ?」

「そういう果南だつて涙目じゃない…」

「うふふ。よし!皆行くよ!」

「「うん!」」

「どうする?番号言う?手、繋ぐ?」

「りよーほー」

「じゃあ先に手繋ごうか…」

ギュッ。皆、緊張してるだな。手、あつたかい…

安心する…

「よし！じゃあ番号ね！」

「じゃあ……ちかつち、曜、ダイヤ、果南、マリーで行きましょう♪」
「じゃあ……やるよ……」

1！2！3！4！5！

A q o u r s
サンシャイン
!!!!!!!

#9 ライブ終わりの体育館

A q o u r s のライブ、又の名を新入生歓迎会は大盛況で終わった。

彼女達のライブが一番良く、盛り上がり上がっていたんじゃないか？はは。親バカみたいになってるよ。

もちろん、鞠莉のお父さんは一番後ろで見っていた。

さあ。そろそろ、着替え終わっただろう。

また失敗したら大変だ。

「千歌〜！皆〜！入っていいか？」

ノックと同時に声をかけた。

「「「「いいよ〜」」」」

ガチャつと音をたてて、ドアを開ける。

すると、千歌達はこのこにこしていた。さつきまであのステージの上で踊ってたんだよな？

そう思わせるほど、疲れた様子を見せなかった。

「A q o u r s の皆さん？ お疲れ様でした。」

「なになに？ どうしたの？」

「和が面白い事言ってる〜」

「あつははは！ 和どうしたの？ 大丈夫？」

「和馬？ 大丈夫？ …… プツ」

「和馬さん？ 本当に大丈夫ですか？」

皆して酷くないか？ 俺は感動して言ったのに……

恥をかいた。

「それよりも！ ちかっち！ 曜！ 果南！ ダイヤ！ そして和！ 私の嘘に付き合ってくれてありがとう♪ 作戦成功で〜す」

「じゃあ…… 約束通り和君入学させてくれるよね？」

「もっろん！ 和！ 今からここはあなたの学校よ♪」

「あ、ありがとう！」

俺の入学が決まった。正直入学目当てで最初はマネジャーをしていた。でも千歌達の本気に胸を撃たれた。

嫌な事も楽しい事も分かちあつて、みんなで泣いて笑つて……

そんな毎日が……そこに俺が居ることが楽しかった。

ここに居てもいいんだ。 って思えて本当に嬉しかった。

「あつ！ そうだ！ 皆で打ち上げやらない？」

「いいわね♪ ナイスアイディアよ？ 果南！」

打ち上げの案を出したのは意外な果南だった。

てつきり千歌が言うのかと思った。

「いいね！ やりたい！ やりたい！」

「いいですわね。 それでどこでやるんです？」

「ダイヤはいつも冷静だな。 場所か……」

「6人だろ？ 多いわけではないが少ないわけでもない。」

「松月は？ みかんどら焼きの!!」

「松月…… 何処だろ？」

「みかかね…… 千歌らしいわ……」

「おっ！ いいね！ 千歌ちゃん！」

「ですが、迷惑になりませんか？」

「大丈夫！ 大丈夫！」

結構強引だったが、松月というカフェで打ち上げになった。なんと十千万の近くにあるらしい……

気が付かなかった。

「よし！じゃあ！松月に全速前進？」

「「「「「ヨースロー!!」」」」」

「あつ！忘れ物した！」

「えええええ!!千歌ちゃん!!」

せつかく気合い入れたのにな……

曜はガクツと項垂れている。はは。彼女らしいと言えば彼女らしい……

千歌を待っていると果南が俺だけに声を掛けてきた。

「ねえ？和馬？」

「ん？なんだ？果南？」

「千歌の事迎えに行つてあげて」

「なんで？」

「別にどうでもいいでしょ!!早く!」

「はあ?」

「和馬の気持ち、伝えてあげて。千歌に」

「気持ちって……」

「告白とかじゃなくて…… その…… 今日の感想とか?」

だよな……。告白してこい! って言われてるみたいだった。

「ん。じゃあ行つてくるわ!」

「行つてらっしゃい!!」

俺は数時間前にライブをやっていた体育館に向かった。

く千歌's storyく

忘れ物と言つて、抜け出してきちゃった。

何となくもう1度ステージを見ておきたかった。

もう誰も居ないけど……

私は私達はここで歌って、踊ったんだって感じたかった。

私は輝けたのかな？

”普通怪獣”じゃなくなったのかな？

ここに来て、ステージを見れば答えが分かる気がした。
でも違う。

……………
分かんないよ……………
なんで？

私はうずくまった。暗くて少し怖いくらいの体育館に…………

すると、体育館のドアを開いた。

えっ!?!なんで？

ドアを開けたのは和君だった。

でも彼は昇降口にいるはずだ。

でも、嬉しかった。何となく、暗くて怖い世界にいた私を助けに来てくれたみたい

で…………

不安な世界に1筋の光が差し込んだみたいだった。

「和……………君……………」

「何してんだよ？」

私は気がついたら泣いていた。

「ううん……………なんでも……………ないよ……………」

「なんでもないわけないだろ？泣いてるのに……………」

そう言いながら、彼は私の頬を流れていた涙を手で拭いてくれた。

和君なら私の気持ち話してもいいかな？

不思議と話したいと思った。だから……………

「私ね……………」普通”なんだ……………」

ずっとずっと思ってた考えていた事……………

誰にも言えなかつた事……………

「今日……………私は千歌は輝いてた？輝けたのかな？」

いきなりこんな事聞かされても困るよね……………

「ごめんね…… もういいよ…… なんでもない。」

沈黙に耐え難くなつてなんでもないと。と言つた。

「千歌、お前は輝いてたよ。」

「えっ!?!」

「ステージの上には千歌じゃないのかもしれないって思うくらい……」

「本当に?」

「ああ。」

全然気が付かなかつた。

こういうのつて自分じゃ気が付かないのかも……

「なあ、千歌!」

彼が私の名前を呼んだ。

もちろん振り返る。

すると……

思つたよりも顔が近くにあつた。

それよりも……

……
ちゅ……

えっ!?なんで!?

彼の唇が私の唇に触れた。

自分でも顔が赤くなってるのがわかる。

「あ、あの…… 和君?」

「千歌…… お疲れ様…… そしてありがとう。」

このありがとうが人生で一番嬉しかったかもしれない……

”こちらこそありがとう、和君。大好きだよ♡”

#10 特別な体験

俺は何をしたんだ!!!!

誰もいない体育館で千歌と……

やってしまった……

しかもキスした後、千歌はよっぽど疲れていたのか？それとも俺にキスされたのが嫌だったのか？分からないが、眠ってしまった。いや、前者であって欲しい。

そして、眠った千歌をいわゆるお姫様抱っこで家まで運んだ。

そういや、果南達何処に行った？

打ち上げるじゃなかったのかよ！

それにしても千歌、軽すぎないか？

ちゃんと食べてんのか？本当に大丈夫??

「……んん……お腹……いっぱい……」

ふふふ。やっぱ千歌だな。

寝言でお腹いっぱいって……

「えへへっ……… 和君く………」

幸せそうな顔してんな。

ん？今、俺の名前呼んだ？

夢に俺、出てきてんの？そうであればいい。

何となく嬉しい。

はは。俺、何言ってるんだ？

「ただいま〜。」

「おかえりなさい！」

やっぱいいいな。家に帰って人が居るのは……

「あら！千歌ちゃん!？」

「バカ千歌！寝てんのか！」

まあ。びっくりするよな。

俺もびっくりしたわ……

「とりあえずどうしたらいい？」

「えっと……… 千歌ちゃんのお部屋に運んでくれる？」

「いや、でも………」

いくら何でも、男に勝手に部屋に入られるのは嫌だろう。

「俺の部屋でもいい？」

「なんだ？和馬。千歌にいたずらでもすんのか？」

「しませんよ！」

悪い悪いと謝る美渡ねえ。

全く……この人は……

もしそうするとしたら心配じゃないのか？

大事な妹だろ？

もしかして俺、男だと思われてない!?

とりあえず、千歌を俺の部屋に運んできた。

気持ち良さそうだな。

ほっぺたをぶにぶにする。

なんだこれ!?! 柔らかすぎる……

千歌が起きるまでずっとそばにいた。

気がついたら眠りに付いていた。

—千歌's story—

和君にキスされて……

それからどうしたんだっけ？

安心したら疲れがどっと出て眠くなっちゃったんだよね……

まさか…… 本当に寝ちやっただっけ!?

「んん…… あれ？」

目が覚めると……

知ってるようで知らない部屋。

まだ、夢見てるのかな？

だって和君の部屋にいるなんて……

えっ!? 和君、寝ちやつてる!?
どうしよう!!

「あの…… 和君?」

揺すつても起きないよう!

うーん。

「…………… 千歌……………」

私の名前!?

なんで? キスもそうだけど……

もう! 気になる!!

「和君? 早く起きて?」

もう何がなんでも起こす!

そして理由を聞く!!

「ああ…………… 千歌か……………」

「もう! しつかりして!!」

「ああ。起きたか?」

「うん。ここまで運んでくれたの、和君? ありがとう!」

「ああ。いや。別に。千歌、軽かったし……………」

「そう?」

あつー!いけない!いけない!彼のペースに流されちゃう。

「そうだ!ここまでどうやって運んだの?」

「え?普通に運んでだけど?」

「おぶってじゃなくて?」

「おぶる?抱えるじゃないか?」

か、抱える……

じゃあ和君はここまで私を無自覚でお姫様抱っこしてきたの!?

「もういい／＼／」

「なんで?なんか不味かった?」

「つ、次ね!なんで、私に……その……キス……したの?」

「えっ!?!いや、その……そう!挨拶だよ!」

「挨拶?」

「そう!挨拶!ほら、よくアメリカでするだろ?Hello!チュミみたいな?」

「ふーん。」

私は今、猛烈に怒っています!だって……

何さ!お姫様抱っこは無自覚で、キスは挨拶って!

意識しちゃったこっちが馬鹿みたいじゃん！

って！絶対嘘でしょ！！

全くもうだよ！全くもう！！

「おーい！千歌さーん！」

「なあに？」

わざと気がついて欲しくてほっぺたをぶくぶくつとさせて言った。すると和君は指でほっぺたを押ししてきた。

プツと変な音が出る。

もう！！

「何するの!?!」

「あははっ！千歌、面白い!!」

「面白くないよ……」

「何怒ってんだよ？」

「別に怒ってないもん！ただ……」

「ただ？」

「和君はどうしてそういう事を無意識にするのかなって思っただけ。」

「そういう事？無意識？」

もう！本当に分かってないんだから！

でもそこが彼のいい所だから、教えない！

「うふふ。何でもなくいい！」

「なんだよ！教えろよ！」

こうして、ライブがあつた1日は終わった。

楽しかった！

色々な事があつたけど……

ある意味今日は特別な体験だよね！

明日はどんな事があるかな？

今日よりもいい事があればいいな。

明日も明後日もその先も今と変わらないといいな。

和君と曜ちゃんと果南ちゃんとダイヤちゃんと鞠莉ちゃんと私で笑っていられます

よ
う
に
.
.
.
.
.

1 1 GWの予定

A q o u r s のライブも終わり、俺も学校生活に慣れ始めてきた。最初は軽蔑されると思っていたがそんなことは無く、浦の星の人達は優しく迎え入れてくれた。

ここの人達はそういう人柄なんだろう。いい所だと思う。

今日はA q o u r s の今後について鞠莉から話があるらしい。

さて、千歌達を迎えに行くか……

千歌達2年生の教室は2階にある。ちなみに俺達3年生の教室は3階にある。

「千歌〜!」

「おっ!和君!!」

俺達にとつては普通の会話。だが……

「なになに?」「千歌の彼氏?」「かつこいい!!」

なるほどな…

俺達ってそんな風に見えるのか?

「もう!むっちゃん達、やめてよ!和君はそんなんじゃないよ!」

「ええ!そうなの?」

「そうなの！」

「この子達は仲が良いのか？悪いのか？」

「迎えに来てくれたの？」

「おっ！おおう。」

「えっへへ♪ありがとっ♪」

「何なんだ。この笑顔。ずるいだろ！」

「和じゃん！どうしたの？」

「あっ！曜ちゃん！どこ行ってたの？」

「ごめんね！千歌ちゃん！」

5分後……

「さて！全員揃ったことだし！話すわね！」

「なんなんですか？」

「A q o u r s はとびつきり、大きなイベント以外は出ないわ！」

「は？鞠莉さん？もう少し、分かるように……」

「だから！普段の活動はしません！」

ああ。A q o u r s の活動はしないのね……

あんな気合い入ったのに良いのか？特にダイヤとか……

「え？えっ!? ラブライブは？私あれほど言いましたわよね？」

いやいやいや！ダメじゃん!!

「ん。そうだったかしら？」

「つと言うことで！A q o u r s 解散!!」

「「了解致した!!」」

千歌と曜と果南は乗り気だな……

てかいのかよ！

「話のわかる子達で良かったわ！ダイヤ以外は……」

「ですから!!」

「ああああ！はいはい！あつ！そうだ！千歌たちは少し残って！」

「ふえ？千歌だけ？」

「あら？都合悪い？」

「ううん！大丈夫！じゃあ和君待っててね♪」

「あら！ラブラブね！」

「だから！そんなんじゃないってば／／／」

「照れても説得力ないわよ？」

千歌と鞠莉はどこかへ行ってしまった。

俺は1人でどこにいろってんだよ！

鞠莉ちゃんに用があると言われたんだけど……

なんで！理事長室なの？

妙に緊張するじゃん！！

何？千歌なんか悪いことしたかな？

もしかしてこの間の数学のテストが悪かったから……

え？えっ!?私、浦の星にもう居れないの？

「千歌っちゅー！珈琲がいい？紅茶がいい？それとも……オレンジ……」
「みかん!!」

「oh! sorry!! みかんジュースがいい?」

「私の方こそごめんね。みかんジュースで!」

「OK! そんな緊張しないで! テストの点数が悪かったからとか浦の星から出ていって
もううとかじゃないから:」

「なんで分かったの? 鞠莉ちゃん、エスパ?」

「ふふふ。そんなんじゃないわよ。ソファア座ってて!」

良かった... 違うんだ!

でもならなくて私の事呼んだの?

「はい! お待たせ!」

「あ、ありがとう!」

「千歌つちって珈琲とかダメ?」

「うん:... 珈琲はどうも苦手で... あはは:... 紅茶は大丈夫だけどね:...」

「そうなの? 美味しいのに:...」

「子供みたい:... だよね:...」

「そんな事無いわよ!! それが千歌つちでそれが可愛いのよ! 自信持つて!!」

「ありがとう:... 鞠莉ちゃん:...」

ニコッと笑ってみせた。

鞠莉ちゃんも安心したみたいに笑ってくれた。

「あつ！いけない！千歌っち！用っていうのはね……」

鞠莉ちゃんは机の中から紙を2枚取り出して私に見せた。

「なあに？これ？」

「ticketよ！」

「チケ、チケツト？」

鞠莉ちゃんのチケツトの発音が良すぎて一瞬分からなかった。

「千歌っち！八景島シーパラダイスっていう水族館行ったことある？」

「聞いたことならあるけど……」

「そう。そのなんだけど……」

「そうなんだ！凄いな！あそこ遠いんだって！気をつけてね♪」

「あ、いや。私じゃなくて……」

「え？」

「千歌っちにあげる！」

「え？いやいやいや！要らないよ！鞠莉ちゃんのでしょ！それに私、一緒に行く人居ないし……」

「いし……」

そういう所って彼氏とかで行くんではしょ？

私には居ないし…

鞠莉ちゃんには居そうだな…

「居るじゃない！和が!!」

和つて?ん?ええええ!!和君!?

いや、まあね。行きたいなとは思うけどね…

つて!なんで鞠莉ちゃん知ってるの!?

「そりゃあ千歌つちの顔見てれば分かるわよ!」

「えっ!?今声に出てた?」

「あははっ!面白い!!じゃあ!行ってらっしゃい!!」

「え?いや、ちよつと!」

「お土産話よろしくね〜!」

「いや、鞠莉ちゃん!!」

「あつ!喧嘩はしちゃダメよ?」

「いや、だから!」

ボタン

理事長室の扉を閉められてしまった。

本当に鞠莉ちゃんは勝手なんだから!

でも八景島か……

1 回行って見たかったんだよね……

誘ってみてもいいかな？

「お待ちせ〜！」

「おっ！ やつとか……」

「ごめんね〜」

「はいよ〜！」

「じゃあ帰ろっか〜！」

いつもと同じ様に彼の横に立って帰る。

いつもと違うのは歩いて帰ってる事かな？

「歩いて帰るなんて、なんか悩み事？相談？」

「ふえ？ええーと」

「大丈夫か？」

これはデートのお誘いじゃない。違う違う違う違う違う違う違う違う！！

「おーい！」

「和君!!」

「おお！どうした？」

「GW！私と一緒に出掛けませんか？」

「ええーと。はい？」

「八景島シーパラダイスっていう水族館に行かない？」

「ああく。いいぞ！」

いや、そんなあつさり……………

こんなに緊張したのに……………

「でもここからじゃ遠いだろ？」

「そーなんだよね……………」

「まあいいか！よし！じゃあ土曜日な！」

「本当に行ってくれるの？」

「ああ。楽しみだな〜」

「うん！」

こうして私達はGWに八景島に行く事になった。

和君も言ってたけど楽しみだな〜♪

こういう結果になったのも鞠莉ちゃんのおかげだよ！

お礼は何がいいかな？

そういえば、お土産話よろしくねって言ってたけど……

お土産話って何？

1 2 俺と私の初デート♡ 前編

千歌からシーパラの誘いを貰った時は夢だと思った。

だって、千歌から誘って貰えるとは思ってはいなかったし、シーパラに行こうと言われるとも思わなかった。

だってあそこは水族館も遊園地もあるからリア充めっちゃいるし……

もしかして……これはデートのお誘い？

え？ええええええ!? そうだったのか？

いや、千歌だからそんな事ないよな？

もし、デートだったらどうする？

そんな事を考えていたら眠れなかった……

ピッピッピッピッピッピッピッ

目覚ましが鳴った。

はあく。一睡もしなくて俺は今日生きていけるだろうか？

「おはよ！和君!!」

「うおおお！千歌!」

「そんなに驚かなくても……」

「ああ。ごめん。」

びっくりした。目が覚めたら目の前に千歌が好きな人が居るんだぞ！誰でもびっくりすんだろ!!

「どうした？」

「その……千歌、楽しみで……眠れなくて……／＼／＼」

えへへっなんて照れながら言う。

この顔反則だぞ！

俺も楽しみだったんだよ！

「よし！ちよつと早いけど着替えて行くか！」

「うん！じゃあ着替えて来るね♪」

「おう！また後でな！」

さあ。今日の千歌はどんな格好で来るのだろうか？

楽しみ。楽しみ。

「お待ちせしました！和君？」

しっかりしろ！俺！

まあ。無理だな。

今日の千歌の格好は……

白ベースの青チエツクスのオフショルダー？っていうやつに、白のスカート。肩からは青のジージャンを羽織っている。

何でも似合うな。

それが最初の感想だった。

この間の格好も良かったがこれもこれでいい！

「何か変？この時期ってどんな格好したらいいか分からないから難しいんだよね……」

「似合ってるよ……可愛い」

「本当に？……ありがとう／＼／＼」

「さあ。行くか！遠いし……」

「そ、そうだね。シーパラまでLet's go!!」

はい。お話を読んでくれている皆さんに問題です。

ここ、沼津駅からシーパラまでどのくらいかかると思いますか？

はい。正解は2時間40分でした!!

これだけの時間電車か……

「和君!!和君!!次は?」

「ええーと。ここが熱海だから…… 4. 5番線だ!」

「え?こつち!」

そこから14駅……

千歌は俺の肩で眠ってしまった。

「千歌!大船だ!起きろ!」

「うーん。」

「降りるぞ?大丈夫か?」

「次は?」

「9. 10番線まで行くぞ?」

そこから4駅……

やっと、横浜シーサイドラインに乗る。

長い……

やっとの思いで八景島まで到着!!
そこから13分歩いて着くらしい……

「着いた!!」

「ああ。遠かった……」

「さあ〜!遊ぶぞー!!」

「はいよ。ちよつと待ってっ!」

まず、着いてそうそう1日フリーパスを買い、ジェットコースターへ走り出した千歌。

早えよ!!さすが果南に鍛えられだけある……

「おお!上がって落ちて……グルグル!!」

「千歌ー!何してんだよ!並ぶぞー」

「あつ!うん!」

朝だからかそんなに並ばなかった。

GWだよな?

「見てみて!安全バー、パコパコ〜!面白い!!」

「面白くねえよ!危ないわ!!」

従業員によるとこれが普通らしい……

それが一番恐ろしいわ!!

「和君！頂上だよ!!」

「ああ。そうだな。」

「もう！リアクション薄い!! あっ！怖いのか？」

「べ、別に……」

「うふふ。はい。手!!」

千歌は俺の手まで自分の手を持ってきて小さな手で俺の手を握った。

ジェットコースターがダメな訳では無い。

安全バーが安全ではない事が怖い。

千歌は終始笑いつばなしかった。

そんな笑顔もどんな顔も愛おしく見えた。

「ああ。楽しかった!! 次、何乗る？」

「うーん…… そうだな…… あっ！あれは？」

俺が指を指したのは上下で動くものだ。

浮かばない人はディズニーのタワーオブテラーの屋外版だと思ってくれればいい。

「いやあ…… あれはちよつと……」

「なんで？ 行こうぜ！」

「ああ！ ちよつと!!」

半ば強引に千歌を連れてきた。

大丈夫。大丈夫。

「本当に乗るの？」

「ああ。もちろん。」

「じゃあ…… お願ひしてもいい？」

「何？ 何でもどうぞ!!」

「千歌の手と腕、離さないで？」

「え…… はい。分かりました。」

手と腕か……

俺の心臓は何個いるんだよ！

そして、いよいよ俺達の番になった。

「い、いよいよだね……」

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫！大丈夫！」

千歌の手と腕は俺にべつとりくっついていた。

1番上まで上がり、シーパラが全部見えた。

綺麗だな。

次の瞬間、

ダン……

という音がして

シャー

と俺達は落ちていった。

「ああ。怖かった…… もう！乗らない！！」

「あははっ！そんな怒んなって！」

「だって…… 本当に怖かったんだもん……」
「分かった。分かった。もう乗らないから！」

こうして、乗り物に乗って午前中が終わった。
すごく楽しかった。

まだ1日は終わっていないが……

そういえば、俺も小さい時はこんな風に楽しく過ごしていたな……

父さんと母さんと俺でよく週末に遊びに行っていた。

いつから変わってしまったんだろう？

父さんは母さんと俺を置いてどこかへ消え、母さんはいつの間にか出来た借金に追われた。

母さんは元気だろうか？

体は壊していないだろうか？

食事はきちんと3食取っているだろうか？

毎日笑って暮らせているだろうか？

今度会う時がいつになるか分からないが、その時は千歌達と楽しく暮らしているから

心配しないでと伝えよう。

自分勝手な息子だが、いつか伝えよう。

” ありがとう。母さん。千歌と出会わせてくれて…… ”

1 3 俺と私の初デート♡ 後編

乗り物を大体制覇するとお昼位になっていた。

人は結構増えてきた。

皆お昼から来んだな。中には校外学習か修学旅行かで俺達と同じ位の人達もいる。ぐー、ぎゆるぎゆるぎゆる。

しまった。お腹が空いて腹の虫が鳴いてしまった。

くそ！ 恥ずかしい！！

「うふふ。お腹空いたの？」

恥ずかしいが千歌から笑いを取れたからよしとしよう。

よしとするしかあるまい。

「よし！どつかで飯食うか……」

袖を誰かに引つ張られた。

気のせいかとも思ったけど、くいっくいっつと遠慮がちにそれは続いている。

なんだろうと後ろを振り向くと文字通り呼吸が止まった。

「……………ねえ？……………お弁当作ってきたんだけど……………食べない？」

袖をつまんでいたのは千歌の指先だった。

俯き加減のため、彼女の表情は伺えない。

だが、千歌の顔が見れなくて残念だなと思うより、助かったという気持ちの方が強かった。

もう今の状態で、心臓は爆発しそうだ。

「弁当……千歌が作ってくれたのか？」

「うん。まあね……」

「食べる……てか食べない訳が無いだろ？食べる所探そうぜ！」

「うん!!」

手作り弁当か……

早く食べてみたい。

向かった先は、芝生が眩しい広場のようなスペースだった。お弁当を持参するにあたって事前に調べてくれていたらしく、周囲のお客さん同様、レジャーシートまで用意

されていた。

手を拭くためのおしぼり、冷たい麦茶の入った水筒まである。

千歌、意外と気合い入ってないか？

俺が出来たのは木陰に場所を取り、シートを広げるくらいだ。

「ちゃんと味見もしたから、大丈夫だと思うんだけど……」

遠慮がちに言いながら、千歌が2段重ねのランチボックスのふたを開ける。

上の段にはおかずがぎっしりと詰まり、下の段には色とりどりのおにぎりが並んでいた。

「あつ！唐揚げ！ハンバーグ！エビフライも!!」

どれも俺の好きなものばかりだ。

嬉しくなつて、つい大きな声になる。

もうテンションがおかしくなつていて、恥ずかしいと思わなくなつていた。

「良かった。好きなものがあつたみたいで……」

「あつたどころじゃねえよ！好きなものばかりだ。千歌つてエスパーか？」

「エ、エスパー!?!」

冗談半分のひとつことに、千歌は本気になつて考える。

本当にバカだな……冗談だつて……

「エスパーっていうなら鞠莉ちゃんだよ!! 私は探偵かな?」

「なんでエスパーは鞠莉で千歌は探偵?」

「一体どういうことだろうか?」

千歌はあつと自分の口を押さえた。

「言いつぎた、と言わんばかりの態度だ。」

「教えろよ! 気になるだろ?」

「えっと、その……鞠莉ちゃんの件は言わなくていい?」

「ああ。分かった。じゃあ千歌の探偵は?」

「それは……えっと……和君が家に来てから何を食べてたかなとか何の料理を食べてる時が嬉しそうだったかなって思い出して……」

「へ? それって、つまり……」

つまり、千歌が俺の事を見ていたという事だよな?

「こうやって好きなものばかり、作ってきてくれるくらいに。」

「……っ」

ぶわつと顔が赤くなるのが分かり、自分の口を手で覆い隠した。

こんなに暑いのは、カンカン照りの太陽のせいではない。

幸せ過ぎて、めまいを覚えそうだ。

「い、いただきますー！」

俺はパンツと両手をあわせ、ありったけの感謝の気持ちを込めて言った。

最初に手を伸ばしたのは、1番の好物であるからあげだ。

「……………どうかな？」

「めっちゃ美味しい!!美味しいしか言えねえけど、美味しい!!」

「あははっ!沢山あるから、いっぱい食べてね?」

既に2個目に箸を伸ばしていた俺は、リスやハムスターのように頬を膨らませながら、こくこくと頷く。

千歌も食べないのかと視線で促すと、ようやく千歌も箸を手を取った。

「GWって他に予定あるの?」

「GW中に?うーん。特には無いかな?千歌は?」

「うーん。私は、本当はA q o u r sで練習じゃなくてもいいから遊びたいかな?」

「A q o u r sで?」

「うん!もちろん、和君もね…………」

「俺も?A q o u r s?」

「もちろん!!大事なメンバーだよ!」

”大事なメンバー”ね……………

俺もA q o u r sだ、と言われて嬉しいはずなのになんかモヤモヤしていた。

ランチボックスも空っぽになり、片付けを始めた。

そんな時…

「あの… A q o u r sの高海千歌さんですよ？私、A q o u r sの大ファンで…」

「え？本当ですか？ありがとうございます！でも私達、1回しかライブとかしてませんよ？」

「これからもするんですよ？それにあのライブは中継で全世界に繋がってましたよ？」

えっ!?あれって全世界に!?

鞠莉がパパが来なかつた用って言って撮ってたやつだよな？俺が後ろで撮っていた。

「そうだったんだ… ありがとうございます！」

「これからも頑張ってください！応援してます！」

「はい… よろしくお願ひします！」

流石にもうA q o u r sとして活動しないなんて言えないよな…

フアンの人に嘘をついたからか千歌は哀しげな瞳をしていた。

お昼を食べ終わった俺達は水族館を見た。

「ああく！可愛い！ペンギン！」

「本当だ！可愛いな。千歌！あつちにシロクマ居るぞ！」

「シロクマも可愛い！でもここにかえるが居ないのが残念だなあ。」

「かえる!？」

「そう。かえる。淡島には居るんだよ！」

かえるか……

やっぱ千歌って変わってるよな。

「ねえ。今失礼な事考えたでしょ？」

「いや、滅相もございません。」

「そう?。」

おい。千歌、目がマジだったぞ！

楽しい時間というものはあつという間で日が暮れた。

俺達は夜のイルカショーを見て帰ろうとしていた。

本当ならその後の花火も観たかったが、それを観ていると志満ねえと約束した門限を守れないので千歌からの却下を喰らった。そんなに志満ねえって怖いのかよ!!

まだ少し時間があるからトイレに行つてくると言い、千歌の傍から離れてしまった。それがいけなかったんだ……

和君がトイレに行つてゐるから、私は外で待つていた。
するとガラの悪い人達が千歌の方に来た。

「ねえねえお嬢ちゃん、1人?」

「何ですか? やめてください!」

「俺達と遊びに行こうよ?」

「離して! 私は待つてゐる人が居るんです!」

無理やり私の手を引っ張ってどこかへ連れていこうとする。

嫌だ。嫌だ。助けてよ。和君！

「千歌!!」

和君は遠くから走って来た。

「なんだてめえ?」

「彼氏だけど?」

か、彼氏……

「やんのかおらア!!!」

「怪我しない程度にかかって来な?」

かかって来なつて!!

危ないよ!和君?

私の心配はよそにあつという間に5人もいたのに倒してしまった。

こんなに強かつたんだ……

でもそんな事よりも……

「バカ和馬!!」

私は初めて歳上の人を呼び捨てにした。

「なんで私を1人にしたの?」

「ごめん。」

「どうして危ない事するの？」

「ごめん。」

「怖かったんだよ？」

「ごめん。」

私は言いたかったことを全部言った。

すると和君は私を抱きしめて……

「でも、もう一人にしないから……」

「え？」

「俺がずっとそばに居て守ってやるから……」

それって……

「俺、今ので分かった。もう千歌が居ないなんて考えられない。……好きだよ。千歌。」

耳元で囁かれたのがくすぐったいような嬉しいような……

私は言葉を理解した後、涙が流した。

どうしよう……。すごく嬉しい。

「大丈夫か？どうした？」

「私だって、和君の事大好きだよー」

私の気持ちを伝えた瞬間、私達が本来なら観れなかったはずの花火が打ち上がった。まるで私達の事を祝うかのように……

私の気持ちはあのガラの悪い人達のおかげで和君に伝えることが出来た。もちろん怖かったから許さないけど……

少しだけ感謝している。

#14 A q o u r s のこれから

和君とデートして、告白して、付き合って……

昨日はいろんな事があった。

今日は、GW最終日……

そんな事もあつて旅館は大忙し!!

小さい頃からGWの最終日と夏休みのお盆は忙しいのは知ってる。

でも……でも……

折角和君と付き合う事になったのに……

「千歌ちゃん！お部屋まで案内して！」

「千歌～！床の雑巾がけ！」

もうっ！なんで2人して千歌に何でも頼むの？

私はいっつも雑用じゃん!!

あっ！そうだ！

和君に頼んで一緒にやればいいんだ！

「和く君く！一緒に……雑巾がけ……」

え?えっ!?

なんで部屋に居ないの?

千歌を置いてどっか行っちゃったの?

「千歌ちゃん?何してるの?」

「あつ!志満ねえ、案内したよ!」

「そう... ありがとう。果南ちゃん達来てるわよ?」

「え?」

果南ちゃん?達?

曜ちゃんも居るってことかな?

2階から顔を出して下を覗く。

すると、果南、曜、ダイヤ、鞠莉。そして居なくなった和馬が、居た。

「あつ!千歌ちゃん!」

「あら!千歌つち!ハロー♪」

「千歌!やつほ!」

「千歌さん!そんな所から顔を出していたら危ないですわよ?」

外にはいつもと変わらない皆の姿があった。

もちろん、大好きな彼の姿も...

「千歌！手伝いは終わったか？」

「うん！終わったよ！」

「じゃあ、皆入ろうぜ！」

「ヨーソーロー！」

安心したのか、私の目からは涙が流れていた。

誰にも見られてないよね？

皆が私の部屋へ入ってきた。

「じゃあ、俺飲み物取ってくるわ〜」

「お願いね〜」

そう言つて和君は出て行ってしまった。

「なんで皆集まつてここに来たの？」

不思議だった。だって… A q o u r s はもう活動しないんでしょ？なら…
…な
んで…

「千歌っちの意見聞いてなかったなって……」

「私の意見？」

「千歌っちだけじゃなくて皆の意見も……」

そう鞠莉ちゃんが言うと、皆は意思を固めて話始めた。

「私はラブライブ！に出たいですわ！」

「OK！じゃあダイヤはラブライブ！に出るためにこれからも練習するって事ね？」

最初にダイヤさんが言った。

そんな風に思ってたんだ……ラブライブ！って何だろ？

「私はね……どっちでもいいよ？」

「果南？どういう意味？」

「皆でいるのは楽しかったし、ライブが成功した時はやって良かったって思った。で

も……別にラブライブ！を目指したわけじゃないし……」

「なるほどね……分かったわ！ありがとう、果南。」

つぎの果南ちゃんはどっちでもいいと言った。

確かに、そんなハードにしなくてもいいよね……

「私は……やってみたい！」

「曜……」

「確かに果南ちゃんと言っ通りラブライブ！を目指したわけじゃないよ？でもさ…
しかったんだ…」

「そう…」

曜ちゃんはやってみたいか…

「じゃあ、最後！千歌っちは？」

私は…何がしたいんだろ？

「私は…練習じゃなくてもいい。みんなで一緒にいたい！すごく楽しかった。皆と仲良くなれて嬉しかった。こんな毎日が続けば良いのにつてずっと思ってたんだ…」

「そう…じゃあAqoursは千歌っちに任せるわ！」

え？えっ!?任せるって…

「千歌っちがやりたいようにやればいい！大会に出たければそれに向けて練習するし、練習したくないなら一緒に居るだけでもいい。雑談で1日を終えたって…」

やりたいようにやるか…

「いいんじゃないか？Aqoursらしくて…」

「和君…」

「それでいいかしら？皆？」

「もちろん！」「賛成であります！」「もちろんですわ！」

「皆… ありがとう！私頑張るから！」

「うふふ。手伝いはするわよ？」

「うん！ありがとう。鞠莉ちゃん。」

「ええ。あつ！そうだ。千歌っち？昨日どうだった？」

「えっ!? あ、うん… / / /」

「あらっ！照れちゃって、可愛い♡」

まさか、こんな雰囲気の人に言われるとは…

恐るべし鞠莉ちゃん…

「なになに？千歌ちゃんどうしたの？」

「千歌、昨日どこ行ったの？」

「千歌さん！どこ行っただんですの？どなたと行っただんですの？まさか… 破廉恥な事

でもっ！」

ほらね。皆興味を持って質問してきちゃったよ…

今思いつきだけで恥ずかしいのに…

鞠莉ちゃんは… 笑ってる… 悪魔だ。

「千歌っち、勿体ぶらずに教えてあげなさいよ〜」

鞠莉ちゃんは一体私達の何をどこまで知ってるんだろ？

和君：．． 助けてー

助けを求めた彼は：．．

「あつ！ そうだ！ 志満ねえに手伝い頼まれてたんだつた．．． じゃあ失礼しまゝす。」

あつ！ 逃げたつ！

もうつ！

「千歌つちは逃げないでね？」

はい。ごめんなさい。

「えつと．． 昨日は八景島に行ったの．．．」

どうして行ったのか？ そこからできる限り詳しく話した。

そして、あの事件の事．．

「それで、連れていかれそうになったら和君が走ってきてくれて．．．」

「それで．．． こてんぱんにやつつけて告白と．．．」

なんで分かったの？

「そりやあ分かるわよ。逆にそうならない方が不思議よ。」

そういうものなのかな？

「じゃあもう付き合ってるの？」

「うん！ そうだよ。どうしたの？ 果南ちゃん？」

「んーなんかさそんな感じしなくなってる……」

「どういう意味？」

「付き合ってるのにいつもと一緒だよ？」

いつもと一緒……か……

「確かにそうかもね？ だけど私達はこれでいいんだと思う。別に関係が変わったわけでは無いでしょ？ 増えただけだよ？」

だから、いいんだよ。

変わろうと思わなくても……

「そうだな。」

「和君!?! 聞いてたの!?!」

「ごめんな。千歌。」

なんか空気重くなっちゃったかな？

「いいわね〜青春じゃなくいい!!」

「そうだね。おめでどう、千歌。」

「おめでどうございます。千歌さん。」

「おめでどう! 千歌ちゃん! 大好きだよ!」

「わわっ! 曜ちゃん! 皆もありがとう。」

皆に祝ってもらえました！

やっぱり鞠莉ちゃんは凄いな。

あんなに重かったのに……

あつ！忘れてたけど、A q o u r sはこれから私が引つ張っていくんだよね……
次はみんなで何をしようかな？

#15 Aqoursへようこそ!!

Aqoursが私に任されてから2週間が経った。

「千一歌ーさん!!今後Aqoursはどうするんですの?早く決めてください!!」

「ここ最近、日に日に催促されている。」

でも決めてと言われてもね……

「ダイヤさん。もう少し待っててください。」

「もう少し、もう少しといつまで待てばいいのです?」

「すみません……」

うーん…… どうしたらいいのかな?

「あ、あの……」

誰か来たみたい……

それも1人では無く、2人……

1人は赤髪ツインテールの目の瞳が少しだけダイヤさんに似てる子。

もう1人は栗色のセミロングに優しそうな黄色い瞳のいかにも女の子という感じの子だ。

見たことない顔だな… 1年生かな？

だとしてもなんで1年生が？しかも2人も…

ダイヤさんは…

「あら！ルビィ!!んもう！可愛いですわね!!」

ダイヤさん… その声は何処から出てるんです？さつきまであんなに怒ってたのに…

「お姉ちゃん… 苦しいよ」

「はっ！私としたことが… それでどうしたんですの？花丸さんも…」

「あっ！マルたちはスクールアイドル部に入りたいなって思ってた…」

ルビィちゃんと花丸ちゃんか…

うん！可愛い♡

用件が… スクールアイドル部に入り… たい？

え？えっ!?本当に？

「大歓迎だよ！」

「ピギィー…」

「うわっ！びつくりした」

「あ、ごめんなさい。うう…」

私をびっくりさせた事を反省して涙目になるルビィちゃん。

「大丈夫だよ。私もごめんね?」

「いえ。あの…。ルビィ、スクールアイドル部に入っているんですか?花丸ちゃんも!!」

「もちろん!!大々大歓迎だよ!」

私がそう言うのと花のつぼみが開いたようにルビィちゃんは笑った。

「よろしく願います!!」

これでAqoursは和君を入れて8人。

人数が増えるとそれだけ大変だけど、楽しいよね!

これから沢山ルビィちゃんと花丸ちゃんとお話しよう!

「なあー!もう1人入れてあげて欲しいんだけど?」

和君がそう言うって1年生の女の子らしき子を連れてきた。

セミロングに小さなお団子がくっ付いている。青い髪の毛で顔立ちはとても綺麗!

「あつ!善子ちゃん!!(津島さん!!)」

ルビィちゃんと花丸ちゃんと知り合いだったみたい…

まあ、それもそうだよね…

だって1年生は1クラスだし…

「善子じゃなくてヨハネ!!私はヨハネなんだからね!!」

「はいはい。自称墮天使の善子！」

「ちよつと和馬！いくら先輩でも許さないわよ？」

善子ちゃんと和君はまるでずっと一緒に過ごしていた夫婦みたいに話している。

どうしてだろ？モヤモヤする……

「こほん。それで？和馬さんと善子さんは「ヨハネ!!」んもう！ヨハネさんはどういうお関係で？」

「ああ。善子と俺は幼馴染なんだ。」

「「ええええええええええ!!」」

びつくりした。

和君にも幼馴染が居たんだ。

「え？じゃあマルと幼稚園も一緒ですか？マル、善子ちゃんと同じ幼稚園なんです。」

「ああー。それは違うな。幼馴染って言っても親が知り合いでよく会ってたって感じの幼馴染だから……」

「あつ!千歌さんって高海さんですよね?」

「あ、うん。そうだよ。」

「私、千歌さんとも会ったことありますよ?」

「えっ!?私と?」

「はい。私の母と高海さんと和馬のお母さんは学生時代の友達らしいですよ?」

以外にも接点があった。

てことは……私達は会ったことがある?

全然覚えてない。

でも和君も私とは初めて会ったって言ってたし……

私と和君は覚えてないけど一番下の善子ちゃんは覚えてる?

どういう事?

「まあ、取り敢えずルビィと花丸さんはスクールアイドル部に入るといふ事で……善子さんは?」「ヨハネよ!!…… そうね…… 取り敢えず入れてもらおうわ!」分かりました。それではこれからよろしくお願いしますわ!!」

ダイヤさんが綺麗にまとめてくれた気がする。

「シャイニー!!あら?凄いわ!果々南!いっぱい居るわ!!」

「え?誰が?おお!!新入生!!」

「えっ?! 新入生!? ヨーソロー!! 千歌ちゃんもダイヤさんも凄い!!」

理事長の鞠莉ちゃんは今までお仕事をしていた。それを手伝っていた果南ちゃん。

曜ちゃんは水泳部に顔を出していた。

「はじめまして! オラ... じゃなかったマルは国木田花丸です! よろしくお願いします
!!」

「く、黒澤ルビィ... でしゅ! ピギィ!

.....
です。」

丁寧に挨拶をする花丸ちゃんと緊張して囁んじやったルビィちゃん。

「こちらこそ! よろしくね♪」

「久しぶり! ルビィちゃん? 果南だよ? 覚えてる? これからよろしくね♪ もちろん、花丸ちゃんも!」

「ルビィ~~~~マリーお姉ちゃんよ」鞠莉さん!! おやめなさい! ルビィ! こちらへ!」
「アウチ!! 花丸もよろしくね♪」

あれ? 善子ちゃんは?

「何してるの? 善子ちゃんは挨拶しないの?」

「え、えつと.....」

モジモジしてしまう、善子ちゃん.....

そんな所も可愛い……なんてね!

「ギラン! 私は墮天使ヨハネ。皆一緒に墮天使しょ?」

開いた口が塞がらないっていうのはこの事を言うのかな?

あんな真面目そうな子が、墮天使か……

人は見かけに寄らないね!!

善子ちゃんは恥ずかしかったのか顔を真っ赤にしてみました。

「うううう……」

「あらっ! 可愛いわね〜恥ずかしかったの?」

「…… だから嫌だったのに……」

「いいじゃない。別に…… 墮天使だろうがなんだろうが。」

「そうだよ! 好きならそれでいいんだよ!!」

私とかダイヤさんがスクールアイドルを好きな様に、果南ちゃんが海を好きな様に、曜ちゃんご水泳が好きな様に、鞠莉ちゃんがロックが好きな様に、善子ちゃんは墮天使が好きなだけなんだから。

「え?…… 本当に?」

「だから言っただろう。A q o u r s はそういう奴だつて……」

「恥ずかしがる事ありませんわ！」

「そうそう！ダイヤだつてスクールアイドルの事になると善子ちゃんみたいになるんだよー！」

「ちよ！果南さん!!」

「マルは善子ちゃんは善子ちゃんだと思つてるすら！どれだけ長い付き合いだと思つてるすら？」

「ルビイも！自己紹介の時、かつこいいなつて思つたよ！」

「本当に？」

「だから！怖がることないよ！ね？」

最後、曜ちゃんが一番いい所取つてたよね？でもそのおかげで善子ちゃんは何かを決意してみたよ……

「私、変なこと言うわよ？」

「いいよ！いつもなんでしょ？」

善子ちゃんの質問に果南ちゃんが答える。

「たまに変な儀式するかも……」

「それくらい我慢しますわ！」

つぎの質問はダイヤさんが答える。

「リトルデューモンになれ! って言うかも...」

「それは... でも嫌だったら嫌って言う!!」

最後の質問は私が答えた。

「もう覚悟は出来てるみたいね... それじゃあこれからよろしくお願いします!!」

これでAqoursは和君を入れて9人になった。

あつ! そうだ!!

「ねえ! 皆!! 次の活動は新入生のお披露目って事で墮天使アイドルをテーマにライブしない?」

「...」
「...」
「墮天使アイドル!」
「...」
「...」

折角ならみんなの好きなものを取り入れた方がいい。

今回は善子ちゃんって事で!!

だって... 折角自分の好きなものが見つかったのに自信を無くしてるんだもん

まるで羽を無くした墮天使みたい...

「どうかな? どうかな?」

「調べたら何処もやってないみたいだし、いいんじゃないか?」

「本当に!?!」

まさか、和君がいいって言うとは思わなかった。

「いいわよ！楽しそう！！マリー達が墮天使第1発見者よ♪」

「何その名前！第1発見者って…でも墮天使アイドル、楽しそうだね！千歌よく考えたよ！！」

果南ちゃんになでなでしてもらうの好きなんだよね…

もちろんハグもね！

「よーし！衣装担当、渡辺曜！気合い入っちゃうな！！」

「ル、ルビイも！がんばルビイ！！」

「マルも何か手伝うぞら！」

「本当にいいんですの!?そういうものは…」

「もう！ダイヤは固いな!!だから硬度10なんだよ！」

「なっ！なんですの?!硬度10ですって!!」

ダイヤさんはいいのかな？

まあいつか！

「よし！決まり!!」

こうして、墮天使アイドルライブの開催が決まった。

ライブ会場はどうしようかな？

まだまだ決める事が沢山ある。

そして、Aqoursはまだまだスタートラインだ。

「千歌さん……ありがとう……」

善子ちゃんが私だけにそう呟いた。

この言葉が聞きたくて頑張ってるのかもしれない。

そう思えた瞬間だった。

こちらこそ、ありがとう！

そしてこれからよろしくね♪

堕天使ヨハネちゃん

#16 墮天使アイドル!?

千歌の案で次のライブは墮天使アイドルがテーマになった。本人曰く善子が元気が無く自信も無くしてるからだそうだ。

千歌のそういう人を想いやれる所が好きだ。

「ちよ! 皆さん! これは流石に... 短すぎませんか?」

「ダイヤ! ここまで来て何言ってるのよ!」

「折角ルビイちゃんと曜が衣装作ってくれたんだよ?」

「お姉ちゃん.....」

「もう! 仕方ないですわね!!」

なんだか賑やかになつたな。

皆は千歌の部屋で墮天使衣装にお着替え中だ。

もう終わったのか?

「もう終わった?」

同じ失敗を繰り返す男じゃないんだ。

失敗から学ばんだよ! そう。怒らせたら千歌は怖い。

「終わったわよ〜」

「えっ?! ちよつと!」

その千歌の声を聞き取れなかった。

そして俺は……開けてしまった。

パツシーン

一瞬何が起きたか分からなかった。

だって俺は着替えが終わったと言われたから開けたまでだ。

そしてなんと言っても……痛い……

それから5分後

「全くもうだよ! 全く……」

千歌さんは激おこ。ぶんぶん丸です。

因みに今日も千歌さんはみかん色でした。以上。

「鞠莉さんがあんな悪戯するからですわよ? 分かっているんですの?」

「分かっているわよ! だから機嫌治して? 千歌っち?」

「う、うん……」

「よし! じゃあ千歌着替えてこよう!」

そう。千歌は機嫌を損ねて折角着替えていたのに普段着になってしまった。

もちろん、皆も。

「うん……着替える……でもその前に和君は部屋から出てって!!」
ガーン。俺はショックだよ。千歌さん? 悪いのは鞠莉だからな!!
そしてやつと10分後

「お待たせ! リトルデーモン!」

そう言つて善子が1番に出てきた。

うん。いつも通り。

「何か言いなさいよ!!」

「え、えつと……いいね。」

「もういいわよ。どうせ狙いは千歌でしょ?」

そう言えばこいつ千歌にさん付けなくなつたな。

千歌だけじゃなくて曜も3年組も。

「じゃあリトルデーモン1号は千歌だから2号からね♪」

「なんで?」

「当たり前でしょ! 楽しみは最後まで取つとくの!」

ええええええ……早く千歌がみたい。

「さあ、いでよ! リトルデーモン2号!」

「ヨーソロー!!」

あつ。2号は曜なんだ。

同じ墮天使っていうテーマのはずなのに、こんなに雰囲気が違うのか…

曜は前髪分けがいつもと違うから?

「どうどう?」

「いつもと雰囲気違うな。可愛い。」

「ヤッター!」

「ちよつと私の時と態度違くない?」

「さあ!次へ行こう!!」

「ちよつと!!つ、次はリトルデーモン3号ね♪」

「ずらく」

おお。花丸はそういう感じじゃないから心配だったが、全然心配要らなかった。

ちよつとしたお嬢様みたいだ。

「マルには何も言わないで。」

「なんで?」

「千歌ちゃんが…」

千歌?なんでこのタイミングで千歌?

まあいいか。

「ああ。分かった？」

「じゃ、次行くわよ？リトルデーモン5号!!」

「ひゃ、ひゃい！ヨハネ様のリトルデーモン5号！く、黒澤ルビイです！可愛がつてね？」

か、可愛すぎる。

でも、これはまたダイヤが怒りそうな…

「ルビイ、キュン死していい？」

「ええええええ!!ダメく！」

「何この2人…」

「あはは。」

善子と曜から冷たい視線が…

気にしない。気にしない。

「あ、ああああ！」

「花丸ちゃん!!」

「どうしたのよ？あつ。」

「『千歌（ちゃん、さん）!!』」

まずい…… やり過ぎた。

「ふくん。和君はいつもそうやって女の子を誑かしてるんだ。」

「なっ！ちげーよ！」

「どうぞ。どうぞ。」彼女の”千歌なんかほっといて好きにしてください。」

出た。千歌の敬語。

怒られてるけど一つ言わせて頂きます。

一応俺に衣装を見せないように顔だけひよっこりしてるのが可愛すぎる。

「ちよつと聞いているの？おーい!!」

「ごめんな。千歌。でもさっきの全部本心じゃないから。」

「」「えっ!?本心じゃないの!?(ずら!)(」」」

「そっか……。でも皆が可哀想だよ?」

本当にごめんな。でも千歌が1番だから。絶対に。

「じゃ、じゃあ気を取り直して、リトルデーモン6号!」

「な、何ですか?」

ダ、ダイヤが……

てか本当にダイヤか?

だって髪の毛はクルクルに巻いていつもの大和撫子の雰囲気は全く感じない。

「はい。もう私はおしまいですわ。さあ次へ行ってください。早く!!」
喋ると残念だな。

「もう、めんどくさいから7号と8号いらつしやい。」

「何よ!!もう!!マリーと果南を一緒にして!!」

「私達の扱いおかしいよね?ん?善子ちゃん??」

「ご、ごめんなさい。」

確かに一緒にしたくなる気持ちも分かる。だって2人はあまりにも変わらな過ぎる。
まんまだな。

「さあ。メインディッシュよ!リトルデーモン1号!千歌!!」

そう善子が言ったのに出てこない。

おかしいな。

「おい!千歌?」

「うううう…… 和君?!?!」

「何してんだよ?」

「……短くて……」

短い?なにが?

「スカート短すぎて和君に見せられない。」

ははははは。スカートが短い？

何を今更：君はいつも制服のスカートが短いじゃないか。
俺はどれだけ苦労をしてると思ってるんだよ。

「いつもスカート短いだろ？」

「それとこれとは違うの!!」

「あくそう。でも一回だけ立ってみて？」

「だから……」

「いいからいいから。」

そう言う俺は千歌を無理やり立たせた。

あの……俺、本当に死んでいいですか？

「……和君？何か言ってるよ……恥ずかしいじゃん／＼／＼」

「あの……え、えっと……か、可愛いよ……／＼／＼」

恥ず!!!

しかも2人で照れてるし……

「あ、ありがとう……／＼／＼」

「お、おう。」

「うふふ……あつ！和君……鼻血……」

「え？うわあ〜」

「恥ずかしすぎる。」

「いくら千歌が可愛いからって鼻血なんて……」

「確かに1発でやられたんだけど……」

「だって恥ずかしがって足はモジモジしてるし、それに加えて涙目&上目遣いだぞ！」

「当たり前だ。」

「イチヤイチヤしてるとこ悪いんだけど……誰かさんがオーバーヒートしてるから……」

「「えっ!」」

「破廉恥ですわ……バタツ」

「「ダイヤ(さん)?!」」

「それで?ダイヤはほつといてどうするのよ?」

「善子ちゃん!ダイヤさんほつとかないであげて……」

「取り敢えず堕天使アイドルは中止だな。」

「えっ!?!なんで!!」

「こんな可愛すぎる千歌をファンの人に見せたくないから……」

「……もう……和君たらっ……」

「だから!イチヤイチヤすんな〜」

「善子ちゃん落ち着くずら」

全く… 騒々しい奴らだ。

「本当に中止にするんですか？」

「確かに… 何かもつたいない気がするよね…」

んー。まあでもな…

こんな可愛すぎるAqoursを見せたら間違いない危ない。

ストーカーとか出てくるからな。

そうしたら俺一人じゃ守つてられねーぞ？

「あつーなら！ 動画とかなら大丈夫じゃない？」

動画ね…

「和君、心配してくれるのは嬉しいけど衣装作っちゃったしその位はいいんじゃないかな？」

「まあ。そこまで言うなら…」

「ありがとう！ 和君♪」

あんな捨てられた子犬みたいな顔されたら断れないだろ…

こうしてAqoursは学校のホームページに1日限定で動画を上げた。

これが吉と出るか凶と出るか…

#17 りこっぴーの襲来

動画を上げた次の日……

「大変！大変！」

ルビィが走って俺の教室に来た。

もちろん、果南もダイヤも鞠莉もいる。

「これ！見て！！」

「こ、これは？」

「昨日の動画1日限定だったのに10万回も再生されたの！！」

「「「ええええええ！！」」」

「それで？コメントとかは？」

「1番最初の人は……りこっぴーさんで『Aqoursの墮天使可愛すぎる♡浦の星女学院か……いい学校ですね』だって」

ん？りこっぴー？

どっかで聞いたことが……

「他にも沢山コメントが付いています！！」

「1日はもつたいなかったかしら？」

「善子ちゃん!？」

「ヨハネよ!」

そんな話をしていると…

「大変だよー!」

「今度は何だ？」

「転校生だよー! 転校生!!」

「あらっ! 珍しいですわね？」

「そうなんですよ!! しかも! 作曲が出来る!」

「へえ! それで? その子は?」

「は、はじめまして。桜内梨子です。」

「え? 梨子!？」「あっ! 貴方は!」

まさかの梨子との再開。

ああ。さっきのりこっぴーは梨子か…

因みに梨子は東京で初めて出来た友達だ。

ん? 後ろから凄い殺気が…

「和君? どういう事か説明してね?」

にこつにこつしながら言ってくる。

悪魔だ。

全部説明するとふと元の千歌に戻った。

「そういうことなら言ってくれればいいじゃん。別に怒ってないから…ね？」

「お、おう。ごめんな。」

「でも…なんでそんなに女の子との関わりがあるの？…嫉妬しちゃうな…」

きつとこれが千歌の本音だろう。

気が付かないうちに不安にさせてたかな？

「はいはい。2人共！隙あればイチャイチャしない！」

「はい。すいません。」

果南に怒られた。

最近こういう事増えてるな。

気をつけなければ…

千歌の怒り方は果南の怒り方から学んだ物だろう。

という事は果南は千歌よりも何十倍も何百倍も怖いということだ。

「あ、あの…ちよつといい？」

「ん？なあに？梨子ちゃん？」

「高海さんと和馬くんは付き合ってるの？」

「へっ……／＼／＼／＼」

唐突に聞かれるとその…… 恥ずかしいな。まだ。

「うふふ。2人とも照れちゃって……」

それで？高海さん、私をここに連れてきて何するつもり？」

「ふえ？あつ！そうだった。スクールアイドル好き？あと！千歌でいいよ！」

「うん！千歌ちゃん♪でもごめんね？スクールアイドルは知らないの……」

嘘だ。だって絶対あのりこっぴーは梨子なんだ。

絶対好きはずだ。上げた動画に1番最初にコメントするくらいに……

「そっか……じゃあ！」

「え？」

梨子の手を取ると……

「一緒にやってみよう！それが1番！」

私達A q o u r sを知ってもらおう！それで梨子ちゃんがやりたくないなって思ったらやらなきゃいいしやりたくなって思ったらやればいいよ！」

「え、ああ。うん。」

半ば強引に梨子は練習に参加することに……

「1. 2. 3. 4! はい!そこでターン!!」

「ピギイ!!」

「ルビイちゃん!?大丈夫?」

「あつ!ごめんなさい。」

「大丈夫。大丈夫。さあもう1回!全速前進?」

「ヨ、ヨソーロー!」

「はい。よく出来ました!」

うん。いつも通りだ。

A q o u r s は皆のことを考えて動ける。

「じゃあもう1回やるよ?」

「1. 2. 3. 4!はい!」

「で、出来た!」

「凄いじゃない!頑張ったわね♪」

「流石私の妹ですわー!」

「はーい!じゃあこの辺で一旦休憩ね?」

こうして休憩時間になった。

「A q o u r s って楽しいわね。もつと違うかと思ってた。」

「違うって?」

「んー。もつと厳しいのかなって…」

「ん? 厳しいぞ? 生ぬるくやってるつもりも無いぞ?」

「ああ。そうじゃなくて… 練習メニューは厳しいわよ? じやなきやあんな素晴らしいライブなんてできないもの。でももつと間違えたら厳しく言われるのかと思ってたの…」

「音ノ木坂はそうだったのか?」

「そうかもね… 先輩達が凄いから…」

「すごく偉い顔をしている。」

「梨子…」

「ねえ! 梨子ちゃん!!」

「え? 何?」

「「入らない(か)? A q o u r s に!」」

「「えっ!」」

まさか… 千歌とハモるとは…

「うふふ。本当に仲いいのね。2人とも。」

梨子にまで笑われた。

「いいわよ。その代わり皆に隠してたことがあるの……だからそれを言わせてちようだい。まあ和馬君は気がついてたみたいだけど……」

そして梨子の口から A q o u r s の動画に1番最初のコメントのりこっぴーは自分だとカミングアウトしたのだった。

「嘘を付いていてごめんなさい。」

「もういいよー！」

千歌を筆頭に梨子に笑いかけた。

「でも……何故嘘なんか……別に正直に言ったって良かったのでは？」

「それは……」

「話したくないなら話さなくていいよ？ほら。ダイヤさん！そんな事聞いちゃダメでしょっ…」

「すいません……梨子さん……」

「あ、あの……違うんです！」

「何が？何が違うの？」

「2つ理由があつて……1つは1番最初にコメントするなんてドン引きされると思ってたからです。」

なるほどな……

考え方が梨子らしいわ…

「もう一つはどんな練習をしているのか観たかったです。本当のAqoursの姿を観たかったの…」

本当の姿ね…

「別に私達は隠したりしないよ？… あっ！善子ちゃんは隠してるね…」

「ヨハネよ!!しかも隠してるって何よ！何にも隠してないわよ…」

「あれ？おかしいぞ。だって今は仮の姿で正体を隠してるんじゃないの？」

「はっ！… んん… リトルデーモンリリーには教えてあげるって事よ。感謝せよ。

我がしもべよ。」

「私がいつしもべになったのよ。しかも！リリーって何？」

すっかり梨子はAqoursに馴染んだ。

善子のおかげかな？いや、千歌か…

「梨子ちゃん！これからよろしくね」

「こちらこそ！よろしくね。千歌ちゃん♪」

「そうだ。梨子？」

「はい。何でしょ？鞠莉さん。」

「マリーだって！まあいいわ。貴方、作曲出来るのよね？」

「はい。まあ一応。人並みには？」

「あら？コンクール優勝者の常連でしょ？」

「な、なんでその事を……」

「小原家をなめないで頂戴♪」

ま、まさか……

梨子が出てたピアノコンクールって……

「うふっ！小原家主催のピアノコンクールよ♪桜内梨子さん？」

「え？えっ!？」

まさかここにも縁があつたなんて……

人生何かあるか分からないな。

「鞠莉さん……からかうのもその辺になさい。」

「え？まさか嘘ですか？」

「ううん。嘘じゃないよ？」

「えっ!?!嘘じゃないんですの?!」

「だから！言ってるでしょ!!もう！ダイヤのお馬鹿さん！」

「そ、そんな……」

ダイヤってやっぱどっか抜けてるよな。ポンコツダイヤ様だな。

キーンコーンカーンコーン♪

キーンコーンカーンコーン♪

このチャイム…:

今何時だ？腕時計を見ると6時30分!?

まずい…: 最終下校時刻だ。

「おい！急いで着替えろ！最終下校だ！」

「「「「「「ええええええ!?」」」」」」

こうして最終下校ギリギリ（アウトだな）に学校を出た。

「それでは。私とルビィは車が来ますので…:」

「花丸ちゃんも乗ってくでしょ?」

「うーん…: じゃ、じゃあお言葉に甘えて…: 乗るぞら!」

「わーい!!」

ダイヤ、ルビィ、花丸は校門で別れた。

後は皆バスだな。梨子も?

「ねえ！皆バスなの?」

「ん? うん。バスだよ?」

「ダイヤとルビィとずら丸以外はね。皆そうよ。」

梨子はどこで降りるんだ？

まあ、着いてからでいいか。

「私と和君が降りるの一番早いんだよね……」

「そうなの？」

「うん。私と和君はみとしーで、鞠莉ちゃんと果南ちゃんはあわしまでしょ。それで曜ちゃんと善子ちゃんは沼津駅までだから。」

「へえ〜」

「千歌〜。梨子ちゃんにここら辺の地名言ったって分かんないでしょ？」

「あつ！そうだね。ごめんね？」

「ううん。気にしてないわよ。」

果南に指摘されて落ち込む千歌。

確かにな。

内浦や沼津では伝わる言葉も他の県から来た人はチンプンカンプンだ。

あれ？おかしいな？

「ねえ！和君には伝わったよ？」

「えっ!？」

そう。俺の記憶が正しければ内浦はもちろん沼津にだつて来たことがない。

それでも千歌の言葉が全て理解出来た。まるでここに来たことがあるかのよう
に……

次はく伊豆・三津シーパラダイスく

伊豆・三津シーパラダイスでございます。

「ああく着いちちゃった。じゃあ皆また明日ね？」

「じゃあな！」

「あつ！待って!!私も!!」

ん？今誰かの声が聞こえたような……

いやいやいや、幻聴かな？

「和君？難しい事考えるのはおしまいだよ？」

「あ。ごめん。」

「ううん。顔が怖かったから。大丈夫？」

「ああ。ありがとな。千歌。」

「うん!……ああああ!!り、梨子ちゃん!？」

え？梨子?!

そんなはずは……

「うわあー!!」

「もうっ! そんなびっくりしなくても……」

「梨子ちゃん。あれで終バスだよ?」

「え? ああそうなの?」

「お家は? もうバスじゃ帰らないから志満ねえに言つて送つて貰うよ?」

「いや、私の家あそこだから!」

梨子が指を指した場所は十千万……

ええええええ!!

「いやいやいや、梨子ちゃんいくら冗談でも……」

「冗談じゃないわ。」

「いや、だつてあそこは千歌の家で旅館で俺の居候先だぞ?」

「まさか…… 梨子ちゃんも…… 居候?」

「違うわよ! その隣! 一軒家!」

まさかまさかの家が隣。

これはもしや……

「梨子ちゃん! 奇跡だよ!」

はい。頂きました。千歌の名言「奇跡だよ」ありがとうございます!

「改めてよろしくね？ 梨子ちゃん！」

「ええ。こちらこそ！ 和馬君もね？」

「お、おう。よろしくな？」

こうして毎朝梨子と学校に行くことになった。

これで千歌とも朝はイチヤイチャ出来なくなったな……

#18 意外な接点と記憶

今日は週が終わる金曜日。

「おはよう！千歌ちゃん、曜ちゃん！それから和馬君も！」

「おはよっ！梨子ちゃん！」

「おはヨーソロー！梨子ちゃん！」

「はよ！梨子。」

このメンバーで朝、学校へ行くのも慣れたな。

梨子がAqoursに入ってからまだ1週間だと言うのに…

早いんだか遅いんだか？

「あつ！また手繋いでるのね。」

「いいじゃん。別に！」

そう言いながら千歌は俺の手をさつきよりも強く握る。

「もうっ！誰が見てるか分からないんだから外ではやらないの!!」

「嫌だ!!」

「まあまあ2人も落ち着いて？あつ！ほら！バス来たよ!!」

ナイスタイミングだな。バスも曜も。

「あつ！千歌達、おはよう！」

「おはヨハネ!!」

「おはよう。果南ちゃん、善子ちゃん。」

「だから！ヨハネだつてば！」

「おはよーしこー！」

「何よ!!ヨハネなんだつてば〜」

出ました。朝の善子弄り。

毎朝このバスの恒例企画だな。

「ほら、梨子？おいで？」

「あつ！果南さん・・・おはようございます。」

未だに梨子の果南さん呼びが治らない。

まあ昔からそうだな。

そうして、俺達は1番後ろの席に座る。

5人がけの席に。

1番窓際が千歌だ。そこから右に俺、曜、善子。

そして果南と梨子は前の席に座る。

「それで？今日はどうすんのよ？」

「んー。金曜日だしなあ〜」

「練習しないの？」

「んー。どうしようかな？」

「次のライブはいつやるの？」

「んー。」

千歌、お前やる気無さすぎ…

さつきから”んー”しか言ってるねえじゃん。

次は〜長浜〜長浜です。

「おはようございます。善子さん。」

「おはよう！善子ちゃん！」

「おはようずらく善子ちゃん♪」

「だから！ヨハネなんだってば!!」

珍しい…

ダイヤとルビィと花丸が乗ってきた。

いつもは車なのに…

「珍しいね。ダイヤがバスなんて…」

「ええ。久しぶりにと思いました…。」

「ねえ。ダイヤさん？」

「何ですか？千歌さん？」

「今日どうすればいいと思う？」

「もちろん！練習でしょう！」

「ですよね…。」

どうしたんだ？

いつになく今日は千歌の様子がおかしい。元気がないっていうか…。

「千歌ちゃん。練習したくないの？」

「ん？そういう訳じゃ無いんだけどね…。」

「あつ！じゃあ！合宿しない？」

「合宿?!」

「うん。練習もするけどお泊まり会みたいかな？あつ！でも場所がないね…。」

「ごめんなさい。ルビイ変な事言って…。」

「ううん。ありがとう！ルビイちゃん!!よし！合宿しよう！家で!!」

「「「「「ええええええ!!」」」」」」

全く…。千歌は唐突に言うんだから…。

でもこっちの方が千歌らしい。

「ですけど！迷惑では？いきなり千歌さんのお家だなんて……」

ダイヤは知らないのか……

千歌の家が旅館だって事……

「ああ。大丈夫。大丈夫。家、旅館だから！それに！今日から月曜日まで私と和君2人だけだから！」

えっ!? そうだったのか？

俺、聞いてないんだけど？

「あつー！ごめん。私、明日は店の手伝いしなきゃ。明日は団体さんが来るからどうしても外せないんだよね……」

「私も!!水泳部の大会だった。」

「ええええええ!!果南ちゃんも曜ちゃんも来れないの?」

「ルビイ達も!」

「マルは○○さんの10周忌でお手伝いずら。」

「私も!ピアノのコンクールだった……」

皆忙しいんだな。

いや、俺達に気を使ったのか？

「善子ちゃんは??」

「私は暇よ。あと!ヨハネ!!」

「じゃあ、善子ちゃんだけでもいいよ!おいでよ!!」

「ええ。いいわよ。」

「善子ちゃん。空気を読むすら!」

「やっぱりな...」

「2人だけなのに悪いと思ったんだろう。気にしなくていいのに...」

「だが、流石は善子。」

「場の空気が読めないのかよ!」

「まあ、別にいいんだが...」

「ということだ善子だけ来る事に...」

「因みに鞠莉も誘ったが忙しく断ったらしい...」

「まあ、こうなるよな。」

「いらつしやいませく善子ちゃん♪」

「あらっ!ちゃんとやれば出来るじゃない!!」

「酷くない?!一応先輩だよ?」

「えっ!?!そうだったんですか?」

「うううう！ムカつく！こんな後輩要らない！！千歌は花丸ちゃんとかルビィちゃんみたいな子がいい！！」

「悪かったわね！」

「取り敢えず！部屋に入れよ！」

「はあゝい。」

このままだとずっと玄関で喧嘩してると思った俺は2人を部屋に入れた。

「ああゝ皆忙しいんだなゝ」

「仕方ないわよ。」

こいつらは馬鹿なのか？

馬鹿と天才は紙一重って言うしな…

いや、鈍いだけなのか？

「にしても珍しいメンバーだな。」

「そうだねゝ」

「そんな事ないわよ！」

「「えっ!？」」

「Aqoursに入る時言ったでしょ！昔から私達は遊んでたんだって！」

そう言えば…

言われたような気がする。

「なんで善子ちゃんは覚えてるの?」

「えっと……私もあんまり詳しく覚えてる訳では無いんだけど……」

「いいよ!関係ないなって事も全部話して!」

「確か……和馬が沼津に住んでいて……」

ちよつと待て!

俺が沼津に住んでいた?!

「それで……いつも3人で遊んでいたのよ。」

「それ、いくつくらい?」

「幼稚園に入る前かしら?」

「善子ちゃんが?」

「ええ。多分だけど……」

てことは……

俺が5歳、千歌が4歳、善子が3歳か……

「後は?何か知らない?」

「ごめんなさい。分からないわ。」

「そっか……ありがとう。でもまさか和君が沼津に住んでいたなんて……」

「俺もびつくりだわ。でも親が関係してるのは間違いないな。」

そう。俺達3人の共通点は幼馴染を除くと親が学生時代の友達ということだけだ。

「あつ！思い出した！」

「なになに？善子ちゃん？」

「昔もあんた達は両思いだったわよ。よく2人から相談されてたわ。」

「…………へ、へえ／＼／＼／＼／＼／」

千歌と同時に顔を紅くする。

「つて！そんな事思ひ出さなくていいんだよ!!」

「そうだ！そうだ！もつと重要な事を言えよ！」

「だって……千歌が関係ないなって事も全部話してつて言つてたから……ヨハネ悪く

ないもん……」

どうして、千歌は余計な事を言つたんだ。余計な事を言うと言つて善子は頭が良いから返つてくるんだよ。

そして、どうして善子さんは捨てられた仔犬みたいな顔してんだよ……

「と、取り敢えず飯にしようぜ！」

「さあ〜カレーを作るよ!!善子ちゃん！手伝つて！」

「はいはい。何すればいい？」

「んー。じゃあね……野菜切って!!」

後ろ姿だけ見るとなんだか姉妹にも見える。
前にもこんな事があつたような……

『よしこちゃん!おやさい、きつて!』

『うん!よいしょ。よいしょ。』

『そうそう!じょうずだね!』

『えへへっ』

『あつ!あぶない!!』

『え?いたい!!うえーん』

『だいしようぶ!いたい、いたい、とんでいけ』

なんだ？今の……

俺の昔の記憶？！

なら、きつと今のは千歌と善子だろう。

「あつ！危ない!!」

「え？きやあ！痛い……」

「大丈夫！大丈夫！痛い痛い飛んで行け」

「ちよつと！ヨハネは子供じゃないわよ!!」

「あはは。懐かしくてつい……」

まさか…… 本当に!?

「どうしたのよ？和馬?」

「どうしたの？大丈夫?あつ！きつと善子ちゃんが包丁使えなすぎてびっくりしちやつ

たんだよー」

「ちよつと！どういう意味よ!!」

「思い出したんだ……」

「えっ!？」

俺はさっきの記憶を全て話した。

「そっかーやつぱり私達は遊んでたのかな？」

「だから言ってるでしょ!」

千歌だけは、まだ何も思い出せていない。

俺みたいに突然過去と重なって戻る可能性があるからな……

「ねえ…… 記憶取り戻したい? 千歌は?」

「なんで?」

「忘れてるってことはきつと何か辛くて忘れたいと思った記憶だったんじゃないの?」

「私はね…… 記憶を取り戻したい! 善子ちゃんと和君に”初めまして”じゃなくて”

久しぶり”って言いたかった。だから……」

「そう。それなら頑張って思い出さなくちゃ!」

「善子ちゃん…… ううううありがとう!! 大好きだよお」

「分かった。分かったから! 離してよお!!」

こうして善子は千歌の部屋で寝た。

さあ、俺は久しぶりにギターでも弾くか……

ん？誰かからメールが着てる。

どうせせ今日のお泊まり会を心配して、ダイヤか果南か梨子からだろう。

だが、俺の予想は見事に外れた。

相手は千歌のお母さんだった。

こんな時間になんだ？

えっと……………

嘘…………… だろ……………

19 記憶

私は善子ちゃんと私の部屋でおしゃべりをしている。

「善子ちゃん♪」

「何よ？あとヨハネ！」

「私達の記憶が全部あったらどうなってたかな？今よりもっと仲良く慣れてたかな？」

「そんなの分かんないわよ。」

「だよね……」

「でも…… 少なくとも昔の話とかは出来たかもね……」

そう。

私は善子ちゃんと昔の話がしたいんだよ……

もつと善子ちゃんの事が知りたいんだよ？初対面みたいな会話したくないんだ

よ……

「ふあ……」

「うふふつ。眠い？善子ちゃん？」

「まだ大丈夫……まだ話すの……」

ありや！善子ちゃんって言ったのにヨハネよ！って言わなかった。そろそろ本当に眠いのかな？

善子ちゃんって意外とこういう所あつて可愛いよね……

「んん……… Z z z」

「おやすみ♪善子ちゃん。」

善子ちゃんに毛布を掛けてあげた。

だつて善子ちゃん、テーブルに突っ伏して寝ちやうんだもん。

私の授業態度みたい……

私もそろそろ寝ようかな？

その日私は夢を見た。

普段夢なんて見ないから不思議な感じだった。

『よしこちゃん！あそびにいこつ！』

『いいようちよつとまってる！』

『かずくんもあそぼう？』

『おれはあそばない！』

『なんで？あそぼうよ！もう！いいよ！よしこちゃん、いこつ！』

なんだろう？

なんかすごく懐かしい。

『よしこちゃん！うみいこつ！』

『いいよ！あつ！ちかちゃん、まってる！あぶない！！』

『よしこちゃん？』

善子ちゃんの方を向くと私の方にトラックが走ってきた。

私は死んじゃうのかな？

そう、思った。

『ちか！あぶない!!』

そうやって和君は私を抱き締めたままコロコロと転がった。

私はそこで目を覚ました。

あれからどうなったんだらう？

その前にあれは過去の記憶なの？

それとも夢なの？

「んん……千歌？大丈夫？」

「善子ちゃん？ごめんね。起こしちゃった？」

「いいのよ。別に。そんな事より結構魔されてたけど？」

「そっか……心配してくれたんだね。ありがとう。でも大丈夫！」

「本当に？」

「うん！だから善子ちゃんはおやすみなさい。」

「ええ。おやすみ。」

こうして善子ちゃんを今度こそベットに寝かした。

私も寝れば良かったんだ。

でも私は居てもたつてもいられなくなって和君の部屋に行った。

コンコン

「和君？まだ起きてる？」

「え？あ、ああ。」

私は動揺していた。

だから今何時か分かってないのに部屋に入った。

この時何時か確認していたら彼の気持ちに気がついてあげられていたのかもしれない。
い。

「千歌？どうした？」

「…………… うとうう」

善子ちゃんの前では強がっていたけど和君を前にすると駄目みたい……私はどうしたらいいか分からなくなって彼に泣きついた。

「大丈夫。大丈夫。落ち着いたら話してくればいいから。」

「……………うううう……………和君……………」

私は彼の胸でひたすら泣いた。

「ぐすつ……………」

「落ち着いた？」

「うん……………ごめんね……………」

「違うぞ。こういう時はありがとうだろ。」

「うん！ありがとう。」

ごめんねよりもありがとうか……………

和君はいつだって優しい。

こんな所を好きになつたんだ。

「それで？千歌はなんで泣きついて来たんだ？怖い夢でも見た？」

「昔の夢を見たの……………多分昔の記憶かな？夢ならいいんだけど……………」

「そうか……………でも記憶取り戻したいって言つてたじゃないか。なんで泣きついて来たんだ？」

「私、夢の中で善子ちゃんと海に行こうとしてトラックに引かれそうになって……. したら和君が飛んできて、千歌を抱き締めたままコロコロ転がって行つたの。そこからどうなったかは分からないんだけど…….」

「そうか……」

しばらくの間沈黙が続いた。

この沈黙、嫌いだな。

和君は何を考えているんだろ？

「千歌が心配してくれるのも分かる。怖かったな……でもそんな事で俺は死なねえよ！」

そんなセリフを言いながら私の頭をを撫でる。

「和君……絶対千歌を1人にしないでね!!」

「あ、ああ。それに！千歌を守るんだったら死んでもいいかな？」

「死んでもいいなんて言わないで！怒るよ？」

「悪い。冗談だって……」

冗談でも許さない。

そんな事言うなんて……

私は和君が死んじやつたら多分生きていけない。

それくらい好きなのに……

「千歌？もう寝ようか？」

「え？…… やだ。」

そう言つて和君のパジャマの袖を掴んだ。

「なんで？だつてもう3時だぞ？」

「だつて…… 思い出しちゃうかも知れないから……」

凄く怖かった。

もう2度と元に戻れないと思った。

もう2度と和君に逢えないと思った。

だから、今日は彼の傍から離れたくない。

次に目を覚まして目の前から和君が居なくなつたらどうしよう。

そんな事ばかり考えていた。

「誰も1人で寝ろなんて言つてないだろ？俺がずっと一緒に寝てやるから……」

「本当に？じゃあ…… 手、繋いでて」

「ああ。これでいい？」

「うん！」

私は彼の手をぎゅっと掴んだ。

たまには怖い思いしてもいいかな？

こうして和君に甘える事が出来るなら

「おやすみ。千歌。」

「おやすみ。和君♪」

翌日……

私は和君より早く起きた。

昨日は色々とお世話になったから、お返ししないとなあ

昨日だけじゃないんだけど……

何がいいかな？

この時私は善子ちゃんが泊まりに来ていたのをすっかり忘れていた。

「いつもありがとね♪和君。」

そう言いながら寝ている和君の頭を撫でていた。

思えば撫でられたことは沢山あるけど撫でたのは初めてかも……

「ちよつとくらいならいいよね……好きだよ。和君♡」

和君のほっぺにキスしようとする、

「んん……おはよう……千歌。」

「んん……えっ!?えっ!?なんで?」

和君は起きてたみたい……

ほっぺからズレて唇にキスしてしまった。

「朝から素敵なモーニングコールをありがとう。」

「い、いつから起きてたの!?!」

「えっと……俺の頭撫でていた所くらい?」

「割と最初じゃん!!」

もう……やだ……

折角恥ずかしくないようにほっぺにキスしたら朝ご飯作るつもりだったのに……

「千歌……」

「今度は……な……んん……」

今度は何? って怒ろうとしたのに、振り返った瞬間キスするなんて……

「千歌からのキス嬉しかったよ?」

「…… 事故だもん…… // // //」

和君って割とキザな事言うよね…… たまに……

絶対顔赤くなってるよね……

「もう1回千歌からして?」

「…… やだ……」

「1回だけしてくれたら朝飯作って食べるから」

「一緒に作ってくれる?」

「ああ。いいぞ。」

「じゃあ…… んん……」

そうして、私からキスしていると……

『大変! 大変! 和馬! 千歌が…… 居なく…… し、失礼しました!』

「待って! 勘違いだから!」

善子ちゃん、家に泊まりに来てたんだった……

「いいの。いいの。邪魔して悪かったわ……」

「そりゃあ…… 千歌があんな服装してたら誤解するのは解るけど!」

ちよつと和君？

あんな服装つて何？

私なんかしちやつた？

「まあ……分かつたわよ……千歌を心配していたのに……」

「あはは。なんかごめんね……」

「千歌も少しは気をつけなさいよ？優しい顔した狼に。」

「狼？何のこと？ここは狼出ないよ？」

「そういう事じゃないわよ……」

呆れた様子の善子ちゃん……

狼つて何？

あの赤ずきんに出てくる狼だよね？

沼津に狼は昔からいないんだよ？

「これだから危ないのよね……」

「私危ないの？」

「善子。色々教えなくていいから……」

「アンタのことですよ！」

「だから！」

「えっ!?!和君、狼なの?」

こうして、お泊まり会は無事に?終わった。

たった1日だったけど、善子ちゃんは生放送?みたいなもので忙しいみたい…
少しは昔みたいに話せていたかな?

話せていたらいいな。

でも、一体私達の間になにがあったんだろう?

#20 A q o u r sからのサプライズ

今日も雨か…

最近暑い日と雨の日と交互にやってくる。

「おはよっ！和君!!」

俺には俺だけの太陽がいつも出てるからそれでいいんだ。

「和君?どうしたの?」

「何でもない。」

「そう?じゃ!学校行こっ!」

俺は無理やり手を引つ張られて学校へ連れて行かれる。

つて!今日、学校無いだろ!

「千歌?今日、学校無いよな?」

「うん?うん!無いよ!授業はね!」

授業は?じゃあ何があるんだ?

「さあ!さあ!行こっ!!曜ちゃん和梨子ちゃんは先に行ってるから!」

「おい!ちよつと待って!」

今日も雨で俺は憂鬱なんだ。

でもこうして彼女が強引に厚い雲の外へ出してくれる。

「はいっ！和君はこれをしててね！」

「これって……目隠しじゃ……」

「いいから！いいから！千歌の手握っててね？」

「お、おう。」

俺は学校に着くと千歌に目隠しさせられた。

前が見えない俺は千歌の手を握ることしか出来ない。

何処に向かっているんだ？

「千歌ちゃん！こっち！こっち！」

「お！主役が来たよ！」

「もう来たんですの！？もう少し待ってください！！」

「ダイヤ！はやくしないさいよ！もう！！マリーがやるわよ！」

「ルビィ達は準備OKだよ！」

「ずら！」

「はい。ヨハネからのプレゼントよ。受け取りなさい！」

「皆ありがとうね♪」

ちよつと感動する感じにすんの辞めてくれよ。俺は何も見えてなくて怖いんだから。

「和君。そこ動かないでね?」

千歌がそう言うのと、そつと俺の手を離した。

「和君!!」

「「「「「「お誕生日おめでとう!!」」」」」」

誕生日?

誰の?

「和君、お誕生日おめでとう!ずつと皆で準備してたんだよ!」

「気づかれるかとヒヤヒヤしましたわ!」

A q u o r s の皆に祝つて貰えるなんて俺は幸せ者だな。

いつも誕生日は1人だったからな。

忘れてたわ..

「あつ!忘れてたでしょ?」

「さあ!千歌!始めるよ?」

「うん!」

まずは皆からのプレゼントだ。

渡してくれる順番は曜、梨子、花丸、善子、ルビィ、ダイヤ、果南、鞠莉。
そして最後に千歌だ。

「はい！私からのプレゼントは…」

黒い水玉のシュシュ？

「引かないで！これね。皆でお揃いなの。ほらっ！」

なるほどな…

一瞬びつくりした。

「これね。今度の予選で付けようと思ってるんだ！和はAqoursのメンバーだからね！」

俺もAqoursのメンバーか…

「ありがとな。曜。」

「次は私ね。私は昔からのプレゼントね。ピアノを弾くわ。」

梨子は昔から俺の好きな曲を弾いてくれる。

「何がいいかしら？」

「そうだな… Aqoursの曲で！」

「うふふっ… はい。分かりました。」

梨子が弾いたのは…

「想いよ。一つになれ。」だ。

これは梨子の「海に還るもの。」に千歌が歌詞を付けたものだ。

「こんなんでいいかしら？」

「十分だ。毎年ありがとな。」

「次はマルずら！マルはね。本ずら！少しでも本を好きになつてくれると嬉しいな。」

「ありがとう。帰つたら読むよ。」

「読んだら感想教えてね？」

「了解！」

花丸は本か…

花丸らしいな。

この本読みやすそうだな。

「次はこのヨハネよ。ヨハネからのプレゼントなんて普通のリトルデーモンじゃ貰えないのよ。」

「あつ！すいません。リトルデーモンでは無いので結構です…。」

「ちよつと！受け取りなさいよ!!」

だつて…善子からのプレゼントなんて何が入ってるか分からないから怖いじゃん。

「ねえ？今失礼なこと考えたでしょ？正直に言いなさいよ!!」

「ごめん。ごめん。それで？プレゼントは何？」

「はい。これよ！」

黒のハンカチ？

「善子なのに……」

「ちよつとどういう意味よ！なんなら魔法陣でも書いてあげましょうか？」

「いえ、結構です……」

びつくりした。

善子だから、変なオカルトグッズかと思った。

まあ、善子は良い子だもんな。

「つ、次はルビィです！」

「はい。」

「ルビィ、何あげていいか分からなくて……」

ルビィがくれたのは、手提げ？

「この手提げはルビィが刺繍したんです！マナージャーさんだから荷物入れるのに必要かな？って思ってた……」

「ありがとう。ルビィは優しいな。」

「えへへっ！」

可愛い。いつも千歌達に荷物を色々持たされてるのを見てくれたんだろう。少しでも俺の負担が減るようになって…

「次は私ですわ!」

「ダイヤは何をくれるんですか?」

「私は……」

ダイヤがくれたのは……

浴衣?

「黒澤家は浴衣もやってますの。その浴衣で千歌さんと沼津のお祭りを回ればいいと思いますして……」

「ダイヤ…… ありがとうな。」

これで千歌と浴衣デートか……

いいな。

「次は私ね? 私は……」

果南がくれるのが怖いのは俺だけか?

ワカメとか刺身とか言いそうで怖い。

「はいっ! どうぞ! アジの刺身とワカメだよ! 私が今日の朝取ったんだ!」

当てちゃった俺が怖い。

誕生日プレゼントに刺身とワカメって何？

「新鮮だよ？」

「あ、ああ。ありがとな。」

「って！今日!？」

「雨降ってるよな？」

「果南さん……怖すぎ。」

「はい！じゃあマリーね！マリーは……」

「鞠莉も変わったものじゃないよな？」

「って思ったら、マカロンか……」

「このマカロン美味しいのよ！フランスに行った時に見つけてね。」

「もしかして……フランスから持ってきたなんて言わないよな？」

「そのパティシエを日本に連れてきたのよ。」

「そっちを持ってきたんかい！」

「鞠莉もぶっ飛んでんな。」

「最後は……あれ？千歌は？」

「さつきから千歌がいない。」

「何処にいるんだ？」

「ああ。千歌ちゃんなら……」

曜が指を指す先には……

「本当にこれなの？」

「千歌ちゃん！早く!!」

千歌は何してるんだ？

「はーい！千歌っちの準備が出来たからプレゼントよ♪」

「ちよつと！鞠莉ちゃん!!」

何なんだ？

「頑張ルビィ！」

「ルビィちゃんまで……」

「あの……和君？お、お誕生日おめでとう……その……／＼／＼」

「なんだ？千歌？」

あんまり急かさないうちに聞く。

「プレゼントは……千歌です……受け取ってくださいますか？」

え？いやいやいや、確かに赤いリボン巻いてるしプレゼントっぽいけど！

「……和君？」

それでいて上目遣いは反則だろ！

「…… うっ！……」

そこから記憶はない。

起きた時にはもう夕方になっていた。

「あつ！起きた？」

「千歌？」

「うん！心配したよ。あれからずつと意識無くて……」

「そうか……」

ちよつと待て！この頭の気持ちいい感覚はなんだ？

ひ、膝枕……

「和君？本当に大丈夫？」

「ああ。千歌の膝が気持ちよくて眠り過ぎただけ……」

「え？…… もうっ／／／変態っ／／／」

千歌は顔を真っ赤にさせてしまった。

可愛い。てかここからの景色最高だな。

「ちよつと?いつまでこうしてるの?もう大丈夫何でしょ?早く起きて!」

「おい!なんだよ...なんで怒ってんだよ...」

「ふんっ!あつかんべー」

「おい!こらっ!待てよ!」

こうして、教室での追っかけっこが始まった。

傍から見たらイチャイチャしてるようにしか見えないだろうが、至って俺たちは真剣だ。

「千歌さくん?和馬さんは起きましたか?」

そう言いながらダイヤが教室に入ってきた。

「ちよつ!何してるんですの!?!教室は走ってはいけませんわよ?」

「ごめんなさい。」

ダイヤは俺の様子を心配して来てくれたらしい。

「千歌さん?和馬さんが目を覚ましたら、私に知らせると言いましたわよね?」

「すいません。和君が...」

「言い訳は聞きたくありませんわ!」

なんか、この2人の空気凄いな....

でもなんだか似てる気がする。

「ふうん。とにかく、千歌さん！あの準備をしますわよ？」

「え？あ、はい。和君！また後でね！バイバイ！」

「さあ、早く歩いてください！」

あの準備ってなんだ？

それから10分後……

「お待たせ！さあ、行こっ！」

「いや、何処に？」

「メインディッシュだよ！誕生日と言ったら？」

「え？えつと……プレゼントは貰ったし、他になんかあんのか？」

「もう！何にも分かってないんだね……あつ！誕生日会とかやった事無いでしょ？」

「まあ……」

「そっか……じゃあ1番最初の誕生日会が出来て嬉しい!!」

千歌はいつもポジティブ思考だよな……

暗い話が嫌いなのもあるだろうけど……

「和君…… 本当にお誕生日おめでとう」

千歌がそう言うのと、1部だけ明かりが付いて、大きなケーキが現れた。

これがメインディッシュ？

「和君？さあ、ロウソクの火を消して？」

「ふう〜」

ロウソクを全て消すと部屋の明かりが全て付いた。

「ここ、部屋だったのか……」

「和君！A q o u r s からのプレゼントを受け取ってください！」

A q o u r s から？

もう十分すぎるほど貰った。

他に何を貰えばいいんだ？

「和馬！ヨハネに自分を誇れる力をくれてありがとう。」

「ルビイには好きなものは好き！って言える勇気をくれてありがとう。」

「マルには本の世界じゃない世界を教えてくれてありがとう。」

『お誕生日おめでとう！』

1年生が口を揃えて言う。

俺、そんな凄いことしたか？

「和馬さん？私には素晴らしい後輩達をくれてありがとうございますわ。」

「和。千歌と曜とまた何か一緒にやらせてくれてありがとう。」

「和。小さい時から私を助けてくれてありがとう。」

『お誕生日おめでとう（ございますわー！）』

今度は3年生が。

皆が語ってる人は俺じゃないのかもしれないくらい、素晴らしい人に聞こえた。

「和！千歌ちゃんとスクールアイドルやらせてくれてありがとう！」

「和馬君、私の嘘を見抜いてくれてA q o u r sに入れてくれてありがとう。」

「和君!!千歌に付き合ってくれてありがとう!!大好きだよ♡」

『お誕生日おめでとう!』

最後は2年生。

お礼を言い終わると梨子がピアノの前に座る。

「和君。A q o u r sからのプレゼントは曲です!この曲はね、和君を思って、みんなで作ったんだ。聞いてください。」

「「「「「No. 10!」」」」」」

No. 10……

すごくいい曲だ。

俺もA q o u r sのメンバーなんだ。

「皆ありがとう。これからもよろしくな!!」

#21 最低で最高な日

いつもは私が和君を起こしに行くのに、今日は寝坊してしまった。

「千歌く早く起きないと学校遅刻するぞ？」

こうして和君に起こされている。

「んん…… あつ。おはよ……」

「はい。おはよう。先に下でご飯食べてろ！布団は俺、片付け置くから。」

「うん！ありがとう！」

そして、いつもとは違う時間に朝ごはんを食べているとテレビではいわゆる朝占いがやっていた。

別に、占いとか信じてないけどね……

何となく気になった。

『今日の1位はうお座の貴方……』

1位はうお座か……

しし座は何位かな？

『5位はかに座の貴方……』

和君は5位か……

2位から6位には無い……

嘘!? いや、でもまだ……

『9位はおひつじ座の貴方……』

7位から11位にも無い……

ということとは?

『ごめんなさい。12位はしし座の貴方。何もかも上手くいかなくてイライラしちや

うかも……』

嘘でしょ!?

いくら12位だからって何もかも上手くいかなくてイライラするなんて……

だから、朝から寝坊しちやったのかな?

『でも大丈夫! そんなしし座の貴方のラッキーアイテムはみかん!』

みかん……

みかんはいつもカバンに入ってるし、私のイメージカラーはみかん色だし、髪の毛も

お母さん譲りのみかん色!

大丈夫……だよね?

「ほら！千歌！早く行くぞ！」

「え？うん！」

占いでたらいつの間にか遅刻ギリギリの時間に……

ああ。まだ頭もボサボサなのに……

「ねえ、やっぱり先行つて！」

「はあ？いや、お前遅刻するぞ？」

「いいから！行つて！」

「遅刻すんなよ？」

やっぱり流石にボサボサで行きたくない。

だつて一応女の子だもん。

それから10分後……

やっと支度が終わった！

いつもより寝癖が凄く、苦勞した。

「よし！じゃ、行つてきます！」

そうやって元気よく家を飛び出したのはいいんだけど……

えっ!? 雨降ってる!?

雨が降っていた。

今日は雨の予報がなかったのに……

バスは来ないかな?

そうもそうだ。

今日はギリギリなんだから。

はあ……

走ろ……

傘もささずに走っていった。

あとちよっと!

わずかに希望が見えた。

遅刻しなくて済む!

そう思ったのも束の間。

後から来たバスが水溜りを私に飛ばした。

最悪……

制服はびしょびしょになってしまった。

替えの体操服も鞆に入れてなくて一緒に濡れてしまった。
もう！なんなの？

この時、私は今日は何の日か忘れていた。

何となく何もかも上手くいかなくてそれどころではなかったからだ。
やつとの思いで学校へ着き、教室に入る。

あれ？皆は？

教室に入ると誰一人としていなかった。

黒板には”Summer vacation”の文字が。

サマーバケーション？

夏休みってこと？

えっ!?!今日夏休みなの？

最近夏休みなのにA q o u r sの練習があつたから学校に来てて休みって感じがし
なかつたんだ。

あれ？でも和くん今日遅刻するなよって言わなかつた？

その時、教室に曜ちゃんが来た。

「千歌ちゃん？」

「あつ！曜ちゃん！今日なんかあるの？あつ！でも夏休みだよね…」

「千歌ちゃんー回落ち着こう?」

曜ちゃんが私の肩をぼんぼんと叩いて落ち着かせてくれる。

「落ち着いた?」

「うん! ありがとう!」

「いつもの事だからね! それよりさ... 制服どうしたの?」

「ふえ? 制服?」

そうだった。制服濡れてたんだ。

「体操服は?」

「体操服も濡れちゃったの... えくん! 曜ちゃん」

「はいはい。泣かない泣かない! じゃあ特別に私の貸してあげよう!」

「本当に?!」

「うん! サイズ一緒だから大丈夫でしょ?」

「ありがとう!!」

やっぱり曜ちゃんは優しいよね。

びしょびしょで透けてるから早く着替えて来ないと!

ちよとど和くんもいないし!

「なあ、曜? 千歌、まだ来て...」

「え？か、和くん!？」

「お、おう。千歌……」

「じゃあ私邪魔みたいだから!」

曜ちゃんが逃げようとする。

なんで今このタイミングで来るの？

「あ、あのさ……」

「ごめん。着替えてくる……」

和くんが私に何か話しかけようとしていたが、私は逃げるように更衣室に入ってしまった。

「千歌ちゃん!」

「曜ちゃん……」

更衣室に逃げた私の後を曜ちゃんが追ってきてくれた。

「大丈夫?」

「うん……」

「なんかあつたの?」

「ううん。何も無いよ!」

私が笑顔を作ってそう答えると曜ちゃんは私のほつぺを両手で伸ばしてきた。

「嘘つき千歌ちゃん」

「っ……嘘つきじゃないもん！」

「嘘つきだよ。だって何も無かったら涙は出ないよ？」

涙？誰が？わたしが？

そんな……なんで？

「実はね……」

曜ちゃんには全て話した。

朝見てた占いの通りに進んでて怖かったこと。

何もかも上手くいかないから和くんにも飽きれられちゃうじゃないかって……

「そうだったんだね……話してくれてありがとう！」

そう言いながら私の頭を撫でる。

「でも大丈夫！占いはあくまでその日の目安なんだよ？」

「分かってるよ……占いを信じてるわけじゃないんだけど……」

「そっか……よしよし……」

曜ちゃん……

「千歌ちゃん？今日は何の日でしょう？」

「え？なんで今なの？」

「いいからいいから。何の日?」

「え、えつと…。」

今日って何日?

夏休みでしょ?

「正解は〜」

「正解は?」

「私と一緒に行くっ!」

「ちよつと曜ちゃん!?!どこに行くの?」

曜ちゃんは私の手を取るとどこかへ向かって歩き出した。

「千歌ちゃん?」

「な、何?」

「今日は何もかも上手くないかなって占い出てたんだよね?」

「う、うん…。」

「でも大丈夫!ここからは千歌ちゃんが主役だから!」

え?主役って?

不思議に思っていると曜ちゃんが私の背中を強く押した。

「千歌ちゃん、お誕生日おめでとう!」

曜ちゃんは誰よりも早く言ってくれた。

『千歌（ちゃん）（さん）（つち）、お誕生日おめでとう！』

皆が声を揃えて言ってくれた。

なんでこんな大切な日、忘れたんだろう。

皆が私を祝ってくれる日。

皆に感謝を伝える日。

自分が主役になれる日。

大好きな日。

「皆ありがとう！」

「どういたしまして。さあ、プレゼント交換ですわよ？」

「うん！」

皆からプレゼントが渡された。

曜ちゃんからはみかん色の髪飾り。

梨子ちゃんからは素敵な伴奏。

新しい曲の仮伴奏かな？

花丸ちゃんからはみかんの本。

ルビィちゃんからはスクールアイドルのグッズと本が何冊も！

善子ちゃんからは黒魔術のグッズじゃなくて、みかん色のタオル。

練習の時に使える！

ダイヤさんからはみかん色の可愛らしい浴衣。

果南ちゃんからは目覚まし時計!?

鞠莉ちゃんからはみかん色のドレス!?

鞠莉ちゃんが言うには、結婚式のお色直し用らしい…

結婚式って気が早くない？

絶対高いよね…

「本当に皆プレゼントまでありがとう！いつも迷惑かけて…それでもここまで付いてきてくれて本当に感謝してる！これからも私と輝いてくれますか？もっともっと先まで付いてきてくれますか？」

最後はライブの後の挨拶みたいになっていた。

それでも皆は

『もちろん！着いていくよ！どこまでも!!』

そう、答えてくれた。

その頃には占いの結果なんて忘れていた。

今日は最低で最高な日だ。

#22 私の願い

「和くん〜！起きて〜」

今日はせつかくの休みなのに千歌が起こしに来た。

「千歌、おはよ…… おやすみ〜」

「ちよつと寝ないでよ！和くん〜」

全く…… 千歌は……

「今日は何の日ですか？」

「え？えつと……」

千歌の誕生日は終わったし、A q o u r s の練習はない日だ。

なら、何だ？なんかあったか？

「もうっ！ぶつぶーですわ！だよ！」

ダイヤの真似か？可愛らしい。

「ちよつと聞いている？おい！」

「お、おう。なんだ？」

「だ・か・ら！今日は花火大会の日なの！」

ああ。花火大会……

ん？花火大会!?

嘘だ。だって花火大会は来週だろ？

「今日、何日だよ？」

「今日は8月の18日ですよ？」

「本当に花火大会じゃねえかよ。」

「だから、さつきから言ってますよね？今日は花火大会なんです。」

夏休みは怖いな。

日付も曜日も分からなくなる。

で、なんでさつきからちよくちよく千歌は敬語なんだ？

「あ、あの……千歌さん？」

「はい。何でしょう？」

「もしかして……怒ってます？」

「はい……千歌はものすごく怒ってます。」

ものすごくくって……

可愛すぎだろ。

怒るのも無理ない。

千歌の誕生日会で俺からのプレゼントは花火大会だと言った。
それを俺は忘れていたのだから。

まあ、約束を忘れてたんじゃなくて日付を忘れてたんだけだな。

「千歌さん？ 取り敢えず花火大会は今日の夜だよな？」

「そうだね。今夜花火大会だよ♪今からやる訳ないじゃん」

「だったらさ、今起こさなくても良かったんじゃ……」

「うっ…… いいの！」

これ、絶対楽しみで…… とかだろ？

可愛すぎか……

俺、大丈夫か？

さつきから可愛すぎしか言っていない気が……

「和くん！絶対誰にも言わないでね？」

「お、おう。」

「実は…… 花火大会が楽しみ過ぎて早く起きちゃって……」

早く起きすぎて暇になった千歌は俺を起こしに来たというわけだ。

「そうだったのか…… じゃあどうする？」

「うーん。あつ！ゲームしよっ！うちに沢山あるんだ！」

「いいぞ。どこにあるんだ？取ってくるよ。」

「ううん。私が取ってくるから大丈夫！」

そう言いながらどこかへ走っていった。

「ただいま〜」

「おかえり。大丈夫か？」

千歌は沢山のゲームを持ってきた。

「こんなにあつたのかよ。」

まあ、好きだからいいんだけどな。

「和くん！私と勝負だよ！ゲームに私が勝ったら私の言うこと聞いて？」

「俺が勝ったら？」

「んーなんでもいいけど……」

「じゃあ……後で決めておくわ。」

「えー。後出しなの？ずるいよ〜」

そう言いながら千歌はゲームの準備をする。

「ゲーム、何がいい？」

「言つとくけど俺、強いからな？」

「大丈夫！千歌の方が強いから！ハンデだよー」

なんなんだ？

この謎の自信は？

俺が選んだのはカートで順位を競うカートゲームだ。

「よおし！千歌が1番とるからね！」

「取れるものなら取ってみろよ」

最初の対決は俺が勝った。

すると千歌は

「うう……悔しい！3回勝負だよ！」

「なんでだよ。今俺が勝っただろ？」

「嫌！もう1回やるの！」

やっぱり千歌は末っ子だな。

「分かった分かった。まだ時間あるしな。」

「やったあゝ和くん、優しい！」

そう言いながら俺に抱きつく千歌。

千歌のみかんが……

いけないいけない。

考えるな。俺！

「よし！気合い入れて頑張るのであります！」

ビシッと決める千歌。

なんか今日の千歌、いつもと違うな。

なんだろう？こう、テンション上がりまくってる感じ。

それから結構時間が経ち、辺りがオレンジ色、いやみかん色になってきた。

「やったあ！これで千歌の勝ちだね！」

結構手加減して、ギリギリの所で勝つという作戦は見事に失敗した。

時間オーバーだ。

「千歌ちゃん？和馬くん？浴衣着るんでしょ？降りてきてー」

志満ねえからお呼びがかかった。

「じゃあ和くん！約束だからね！」

「マジかよ。」

「マジです。」

「分かったよ。早く行ってこい！ここは俺が片付けておくから。」

「はーい！後でね！」

そう言っついていなくなった。

そういえば、俺昔女の子と遊んで今日みたいに負けたことあったよな…

ふと、思い出した。

その子がどの誰かも今では忘れてしまったが、あれが俺の初恋だったのかもしれない。

「おーい。和馬！」

「お、おう。美渡ねえ。」

「このゲーム懐かしいな。昔、あんた達がやってたよね。」
懐かしいそうに目を細める。

美渡ねえの横顔、千歌に似てるな。

ん？今、あんた達って言ったか？

「あの…今はさ、千歌にあいつに何も言わないでね。」

何も言わないで？

なんでだ？

「昔あった事を思い出したんでしょ？和馬が全てを思い出しても千歌には何も言わないで。」

「なんでだよ、なんで千歌は昔の事を思い出しちゃいけないんだよ！」

「ごめんね。でも今はあたしの口からはなんにも言えない。」

「どうしてだよ…。」

また昔か…

昔俺と千歌と善子の間に何があったのか誰も覚えてない。

「記憶つてのは無くなったらそのままでもいいんだよ…」

美渡ねえは寂しそうに呟く。

過去に俺たちの間に何があつたんだらうか。

すると、ドタドタと足音が聞こえた。

「和くん！どう？どう？」

千歌はすぐくテンションが上がっていた。

俺と美渡ねえは今のことは無かったかのように振舞った。

「お、おう。すっげー可愛いよ。」

「え、本当に!？」

「俺がいつ嘘をついたんだよ。」

「やったあ〜」

「おい！バカツプル！イチャイチャするならよそでやれよ…全く…」

「なんでそんな事言うの?! 本当美渡ねえ信じらんない！」

美渡ねえ…

すごいな…

たったひとりの大事な妹を守ろうとしているんだ。

「じゃっ！楽しんできな！」

全く…美渡ねえも素直じゃないな。

「ねえ？和くんは浴衣着ないの？」

「え？ああ。着てくるよ。」

志満ねえが下で浴衣を着せてくれた。

「和くん？終わった？」

「ああ。まあな。」

「うん！かつこいいね！」

「そうか？」

「うん！じゃあ、行こっか！」

「おい！ちよつと待ってて！」

辺りはもうすっかり暗くなっていた。

「あの…あのさ…迷子になっちゃやうかもしれないから…手…繋いでいていい？」

「あ、もちろん…」

千歌の手、小さいな…

そういえば、千歌の顔赤い？

「なあ、千歌？」

「ん？なあに？」

俺がそつと顔を近づけると…

「和くん… やめてよ… 恥ずかしいじゃん…」

「可愛い…」

「え？」

俺が可愛いと言った瞬間、

火花が上がった。

タイミング良すぎだろ…

「うわあく綺麗！」

「そうだな。」

お前の方が綺麗だよなんて言えるわけない。

「ねえねえ。誕生日プレゼントは？」

千歌が俺の袖口を引きながら聞いてくる。

そうだった。

「プレゼントは…」

そう言うと千歌を引き寄せる。

そしてそつとキスをする。

その瞬間花火はファイナーレを迎える。

「和くん……好きだよ……」

「千歌……」

そして花火は終わりを迎えた。

「花火、終わっちゃったね……」

「ああ。そういうえば千歌のお願いってなんだったんだ？」

「え?／＼／＼」

口をぐによごによさせる千歌。

そんな恥ずかしいことだったのか?

「千歌?」

「えっ!?あの……えつと……何があっても千歌と一緒にいてね?／＼／」

「え?ああ。もちろん／＼／」

俺、あんまり照れたことないのに……

今のはヤバかったな……

「じゃあ帰ろうか♪」

「ああ。」

こうして仲良く恋人繋ぎをして帰った。

もちろん同じ屋根の下に…

#23 千歌ちゃんと呼ばれた日

夏休み♪夏休み♪

今日もこんなに晴れていて気持ちいいなあ

外はきつと暑いくらいなんだろう。

でも、今日はA q o u r sの練習がない!

だから、外に出る必要がないの!

さあ、今日はごろごろして過ごそう。

ピンポン♪

ん? 誰だろう?

裏口からだからお客さんじゃないし…

あつ! 曜ちゃんかな?

「は〜い! 今出ますよ〜つと!」

ガチャと裏口を開けるとそこに居たのは…

ダイヤさんだった。

「ダイヤさん?なんで家に?まあ、いいや。どうせ暇だったし。どうぞ、上がって?」

「千歌さん？今、暇とおつしやいましたか？」

「うん。言つたよ。今日A q o u r sの練習ないし…。」

「千歌さん…。」

「そんなため息ついて… ダイヤさん具合悪いんですか？」

「違いますわ！夏休みと言えぱなんですか？」

「夏休み？うーん… 夏祭りに海にプールに… あっ！夏合宿とか？」

「確かにそうかもしれないませんがもう一つ大切なものがあるますわよ。」

「大切なもの？なんですか？それ」

「はあく。夏休みの宿題ですわよ！」

「夏休みの宿題？なんですか？それ」

「千歌さんはとうとうおかしくなつてしまいましたわね。いえ、昔からおかしかったのですがそれにしても…。」

「ダイヤさん？ちよつと失礼ですよ？」

「こほん。ですから宿題が終わつていない方をA q o u r sメンバーから集めてお勉強会をしようかと思つているのですわ！」

「ああなるほど。でも今は間に合つてゐるんで結構です。」

「千歌さん？逃がしませんわよ？」

「いやあ〜」

ダイヤさんの手が私の腕を捕まえて離してくれない。

「痛いよお〜」

「離してやれよ。ダイヤ。」

「和くん!」「和馬さん!」

ダイヤさんは和くんに怒られると私の腕を離してくれた。

いてて…

なんかヒリヒリする。

そんな凄い力で掴んでたの?

「ダイヤ、そんなに千歌と遊びたかったのか?」

「え? そうだったの? ダイヤさん。」

「なっ! 違いますわ! ただ私はお勉強会を…:」

「違うだろ。本当は遊びたいのに素直になれないから勉強会なんて言ってるんだろう?」

和くんははつきり言う。

あーあ。ダイヤさん涙目なっちゃった。かわいそうに。

「ダイヤさん?大丈夫ですよ!遊びたいなら一緒に遊びましょう!」

「ですが……さつき断ったではないですか！」

「それは……勉強するって言うから……」

「え？勉強がダメだったんですの？」

「いや、まあ。だって夏休みに友達に誘われて勉強はしたくないですよ。」

「と、友達……」

あれ？なんでダイヤさん泣いてるの？

なんか変なこと言ったかなあ？

「千歌さん？私はお友達ですか？」

「え？当たり前ですよ！A q o u r sの皆は友達です！そういう気持ちじゃダメなのか
もしれないけど……」

「そうだったんですか……では私が遊びに誘ったら来てくださいますか？」

「はい！もちろん行きますよ！私だけじゃなくて皆行くと思いますよ？」

「本当ですか？」

「はい！必ずではないかもしれませんが……皆予定とかあるんで……」

ダイヤさんってそういうの疎いのかな？

「他に誰か誘いました？」

「いえ、千歌さんが1番最初ですわよ。お家が近いですし……」

「じゃあ誘いに行きましよう！」

あつ！和くん誘おう！

「和くん？一緒に行こう！」

「はあ？なんで俺が……」

「ほらほらー行くよー」

私は手を引いて歩き出す。

そして……

「結局全員集まっちゃったね。」

私とダイヤさんと和くんので皆を誘ったらなんと皆OK！

「こんなにくさんの方に来て頂いて光栄ですわ！」

「ダイヤ、堅苦しいから。」

「果南さん……ですが……」

「お姉ちゃん……ルビイがやりゆ！」

ケーキを作つて持つてきてくれたルビイちゃんが挨拶をする。

「黒澤家にようこそ！お姉ちゃんもルビイも実は人見知りとかであんまりお友達が出来たことないんだ……でもね！ルビイはA q o u r sのみんながお友達になつてくれて本当に良かったと思つてます！だから……これからもお友達でいてください！」

これがルビイちゃんの気持ち…

A q o u r s を結成して本当に良かった。

そう思えた瞬間だった。

「ねえねえ！今日はここで合宿しない？もちろんダイヤさんとルビイちゃんが良ければだけど！」

私はいつもの思いつきで合宿を提案した。

きつと断られるだろうと思っていた。

「もちろん！皆さんがよろしければ家に泊まっていつてくださいますし。」

「うゆ！ルビイもみんなでお泊まりしたい！」

「では！決まりですわね！」

「「「「「はーい！」「「「「「

じゃあ早く志満ねえに連絡しないと！

みんなが携帯を出して連絡を取ろうとするとダイヤさんが意外なことを言った。

「皆さんのご家庭にはもう連絡済みですわ！そして許可を得ていますから連絡しなくて大丈夫ですわよ？」

今私が急に提案したのになんでダイヤさん分かるんだろう？

もしかして…

「ダイヤ、実は楽しみにしてたでしょ？」

「なっ！違いますわ！」

「あら、ダイヤ昔からそうじゃない！」

果南ちゃんと鞠莉ちゃんが問い詰める。

結局ダイヤさんはみんなにこのまま泊まっていつて欲しかったみたい…

だったから最初から素直に言えばいいのに」

「なにか言いましたか？」

「あつ、いえ。なんでもー」

聞こえてたのかな？

それとも声に出ってた？

「声に出てましたわよ。」

「それはすいません…。」

「でも…。ありがとう…。千歌ちゃん…。」

「ふえ？千歌ちゃん？」

「ほら、行きますわよ！」

「ちよつと待ってよーダイヤちゃん！！」

初めて私はダイヤちゃんと呼び、私は千歌ちゃんと呼ばれた日だった。

あれ？　そういえばあれ以来言われてないような…：

それでも千歌はまた呼んでくれる日を待っています！

ダイヤちゃん

A q o u r s を作ってくれて ♪ s に憧れてくれてもう一度 A q o u r s に入って
くれてありがとう!!!

#24 喧嘩

「あ、千歌……おはよ……」

「……お、おはよう……」

朝見かけて挨拶するとすぐに逃げられてしまう。

最近ずっとこんな感じだ。

事の発端は1週間前――

俺は千歌とAqoursの新しい歌詞を考えていた。

今回は恋の歌にするらしい。

「んー恋かあ……」

「恋なら俺としてるだろ?」

「そ、そうだけど……ほら、私たちはもう付き合ってるでしょ?そうじゃなくて片想い中みたいな歌を作りたいの」

なるほどな……

「なんで片想いなんだ?」

「ふえ?だってアイドルは恋愛禁止だよ?」

あつ、そうだった。

俺たちが付き合ってるのも本当はだめなんだもんな…:

「だから、片思いにしなきゃ。フアンの皆に恋してるよーみたいだね。」

確かにそうだ。

だけどなんか複雑だな。

「あーあ全然進まないよーそうだ！みかんジュースでも飲もう！和くんも飲むでしょ？」

「あ、じゃあお願いしようかな？」

「はい。あつ、その歌詞ノート見ちゃだめだからね？」

「分かってるよー」

そんな返事したがだめと言われると見てしまいたくなるのが人間だ。

少しなら、少しだけならいいかな？

そう思いノートを開けてしまった。

それがいけなかったんだ。

ノートにはファーストライブで歌った『元気全開DAY! DAY! DAY!』や梨子
が即興で弾いてくれた『夜空はなんでも知ってるの?』など今までのA q o u r sの曲
のアイディアが殴り書きで書いてあった。

これ、歌詞ノートじゃなくてアイディアノートじゃないのか？
そしてページをめくると今回の歌のアイディアが書いてあった。

ん？これ、アイディアか？

・毎日きつと連絡してね

・大好きだつてずっと聞かせてよいつも

・手繋いで歩いて

・いえなくて黙っちゃう時はこれを見せて甘えてみる

・忙しいつて連発しないで

・大好きな気持ち後回しされちゃったら涙出ちやうの

・誕生日覚えて

なんだこれ、これじゃあまるで取り扱い説明書みたいじゃないか。

ん？なんかそんな曲あったな。

「ただいま〜和くんみかんジュースが……ちよつとしか……なく……て？あー千歌のノート見たの？見たよね？見たんだよね？」

あつ、しまった。

ノート開きっぱなしだった。

「あの、これは違うんだ…」

「人のノート見ておいてなにが違うの？」

確かにそうだ。

勝手にノートを見たことに間違いはない。

「最低…… そんなことする人だとは思わなかったよ……」

「あの…… 千歌？」

「和くんなんて大っ嫌い!!!」

そう言い放すと千歌は走ってどこかへ行ってしまった。

俺は千歌を追いかければ良かったんだ。だけどそれが出来なかった。

好きな人に

大好きな人に

愛してる人に

嫌われた。

その現実が俺の足を止める。

結局千歌は曜の家に居たらしい。

その日の夜に曜から電話がかかってきて志満ねえが迎えに行った。

それからというもの千歌とまとまった会話はしていない。

そのまま1週間が過ぎようとしていた。

「あらっ！和馬！奇遇ね。」

1人で学校に来た俺に向けて言う。

「Aqoursの朝練は？」

「そんなものやってないわよ。リーダーがあんな調子でマネージャーが来ないんだから。」

わざとらしくリーダーの名前も出す。

「そうか…悪かったな。」

「私は責めるためにここで待ってたんじゃないわよ？」

やっぱりそうか。

奇遇なんて言ったがずっと待っていたんだ。

俺のことを…

「それで？話があるんだろう？この際だからなんでも聞いてくれ。」

「千歌っち、私たちには何も話してくれないの。何を聞いても空元気で作り返いなんかしちゃって……」

そうだったのか……

あの千歌が作り笑いね……

「だから、何か知らない？頼れるのは和馬だけなの……お願い……」

そんな泣きそうな顔されたら答えるしかないだろう。

いや、元々答えるつもりだったが……

俺は鞠莉に全て話した。

「ねえ、マリーの意見言ってもいい？」

「なんだよ？」

「そのくだらなーい喧嘩はいつ終わるの？」

くだらない？

俺はきつかけはくだらなくても今すごく悩んでいるというのに……

「お前になにが分かる？俺の気持ち分かるか？大好きだった、愛してた人に嫌われる気持ちは俺にしからないさ!!」

気がついたら俺は怒鳴っていた。

「あ、ごめん……」

「いいえ。ちよつとびつくりしただけよ。ねえ、どうして過去形なの？」

「過去形？なんの事だ？千歌との関係なら終わらせたつもりはないぞ？」

「そんなのマリーだつて分かつてるわよ。違うわ。大好きだった、愛してた人つて言うから。」

そんなこと言つたか？

「ねえ、仲直りする気ない？」

鞠莉がそんな言葉を口にした。

今まで自分から言いたかつた言葉を……

「そうだよ！千歌ちゃんと仲直りしてあげて？」

そう言つて物陰から出てきたのは曜だった。

「曜?!びつくりした……」

「あ、ごめんね……でもね、千歌ちゃん喧嘩した日に私の家に来てたでしょ？あの時の千歌ちゃんすごく泣きそうな顔してた。あんな顔しいたけが病気になった時以来だよ。」

そんな辛い思いさせてたのか……

ごめん……ごめん……千歌……

「少しは自分のした事の重大さがわかったかしら？ 恋する乙女にそんなことしちやだめよ。」

3人で話していると前からしよんぼりした女の子が歩いてきた。

いや、泣いてるのか？

歩いてきたのは千歌だった……

見間違える訳が無い。

だつて愛している人だから。

これから先もずっと……

「おはよっ！ 曜ちゃん！ 鞠莉ちゃん！」

「おはよー千歌ちゃん！」

「グッモーニン！ 千歌っち！」

「お、おはよ。千歌……」

返してくれることを願いながら言った。

このまま、返してくれて今まで通りに出来たらいいな。

なんて、甘いことを考えながら……

しかし、現実には甘くなかった。

「おはよ。鈴木くん……じゃあ……」

そして彼女は走り去ってしまった。

俺は一瞬何を言われたのか分からなかった。

今まで和くんだったよな？

千歌だけは和くんと呼んでくれていた。

俺もその呼び方が好きだった。

それが、鈴木くんに変わった？

それが何を意味しているのか？

それは自分が1番よく分かっていた。

いつの間にか俺と千歌の歯車は止まってしまった……

2 5 私の想い

私は恋の曲にするとA q o u r sのみんなで決めた時真つ先に和くんのが浮かんだ。

和くんに向けての歌にすることを決めた。

マイリストって言うみたい。

書くことを色々考えていると夜中になっていた。

喉乾いたなあ。

そして私は下にあるキッチンへお水を飲みに行った。

「お水〜♪お水〜♪」

鼻歌を歌いながらキッチンを目指して歩いていくと襖の向こうから物音がした。

『待っててくださいー!』

ん? 志満ねえの声?

こんな時間に誰と話してるんだろう?

『志満ちゃん……辛いのは分かるけどしょうがないの……』

辛い? なんのこと?

そして今話してる人は誰？

『志満ねえ、1回落ち着こう…：まだ千歌と和馬が幸せになれる方法があるかもしれない…』

今度は美渡ねえの声？

私と和くんのことってなに？

『そんなの信じられない…：千歌ちゃんと和馬くんが本当は会うべきではなかったなんて…』

私と和くんは会ってはいけなかったの？

どうして…

じゃあ私たちは別れなければいけないの？

別れなかったら今までの日常はもうやってこないの？

私は辛くなってそのまま自分の部屋に戻った。

次の日、和くと歌詞のアイディアを出して考えていてふと思った。

このまま喧嘩して、別れれば和くんはなんの未練もなく、私を忘れられるのではないかと。

辛い思いは私だけでいいのではないかと。

だからわざと歌詞ノートを見ないでと言った。

別に少し恥ずかしいだけで怒ることもなかったのに私は怒って喧嘩して別れようとしていた。

ごめんね……ごめんね……

楽しかったよ……

和くん……

そして1週間後……

朝早めに学校へ行くと曜ちゃんと鞠莉ちゃんと和くんがいた。

笑わなきゃ……

誰にも気づかれないように……

「おはよっ！曜ちゃん！鞠莉ちゃん！」

「おはよー千歌ちゃん！」

「グッモーニン！千歌っち！」

ほらね、上手くいった。

これでもスクールアイドルだもん。

「お、おはよ。千歌……」

なんで……なんでよ……

なんで和くんまで挨拶するの？

私はずっと和くんのことを避けてきたのに……

なんで嫌いになつてくれないの？

私たちは会つてはいけなかつたんだよ？

「おはよ……鈴木くん……じゃあ……」

だから私はあえて呼び方を変えた。

昔からずっと和くんって呼んでたのに……

それを理解したのか、和くんは何も言わなかった。

そう……それでいいんだよ……

和くんは私なんかよりもっと素敵な人と出会って幸せになつてね……

「千歌ちゃんーん！」

遠くから私の名前を呼んできた。

「…………… 曜ちゃん？……………」

「うん！今日水泳部ないから一緒に帰ろ！」

嘘だ…………

プールサイドからはストレッチの掛け声が聞こえてくる。

「曜ちゃん…………… 水泳部は？」

「だからないんだつて…………… それに！今日パパもママもいないから千歌ちゃん泊まるかなあつて！」

曜ちゃんのお父さんもお母さんもない日は私が泊まりに行くのが恒例だった。

「来てくれないの？私寂しいよ……………」

そんなこと言われたら行くしかない。

「行かないわけじゃないじゃん！泊まるよ！」

「本当に？ありがとう！！千歌ちゃん大好き！！」

大好きか…………

よく和くんと言つてたな。

「ねえ、千歌ちゃん……」

「んー？なあに？曜ちゃん？」

「そろそろさ……話してくれない？私じゃ……頼りないかな？」

曜ちゃんが泣きそうな顔をしている。

「こんな顔初めて見た。」

「曜ちゃん……あのね……私聞いちやつたんだ……」

曜ちゃんに私が聞いた全て話した。

私の今の気持ちも……

すると曜ちゃんは私を強く強く抱きしめてくれた。

「うううう……ぐす……　曜ちゃん……」

「大丈夫……　大丈夫……　辛かったね……」

そして曜ちゃんは私と一緒に泣いてくれた。

「でもね、千歌ちゃん……」

「なあに？……　ぐすつ……」

「千歌ちゃんが選んだ道は本当に正解だったのかな？」

「え？何言ってるの？……私と和くんは一緒にいちゃいけないって言われたんだよ？」
「でもさ、もしそれでなにか起こっても和は千歌ちゃんのこと絶対見捨てないと思うよ？」

和くんは私のこと見捨てないの？

なんでよ……なんで……

そんなこと言うの？

そんなこと言われたら諦められなくなっちゃうじゃん……

「千歌ちゃん、今諦められなくなっちゃうって思ったでしょ？」

「えっ!?なんでわかったの？」

「それくらい分かるよ。幼なじみだもん！」

幼なじみね……

そういえば和くんとも幼なじみなんだよね……

「千歌ちゃん！本当に和諦めていいの？それが千歌ちゃんが望んでることなの？和を悲しませることが!!」

和くんを悲しませる？

しかもあんなに温厚な曜ちゃんが怒ってる？

「和くんを悲しませるってどういう意味？なんで曜ちゃんは怒ってるの？」

「今日、千歌ちゃんが学校に来た時3人で話してたんだ。そしたらね、和後悔してるって……千歌ちゃんのノート見たこと……」

和くんが？

私が全部悪いのにな？

「それで今の話聞いたら和はなんにも悪くないじゃんって……」

曜ちゃん……

もしかして……

「曜ちゃん……今まで辛い思いさせてごめんね……私勝手に曜ちゃんは味方だと思ってた……」

「ちよつとまって！私はいつもでも千歌ちゃんの味方だよ？」

「ううん。違うんだよ。曜ちゃん、和くんのこと好きだったんでしょ？」

私はあえてこの際だから思ったことをぶつけてみる。

「違う違う！」

「ふえ？」

「昔はちよつと好きだったなあとは思ってたけどねー」

曜ちゃんは笑って言う。

絶対そうだと思ったんだけどな…

「私のことはどうでもいいの！それより、千歌ちゃんの事でしょ？」

「え、でも…」

「いいの！いいの！それで千歌ちゃんは どうするの？」

「うん！和くんに謝ってくる！やっぱ私がやろうとしてたことは間違えだったよ！」

「うん！それがいいと思う！この選択が私たちの運命を引き裂こうとしても私はいつでも千歌ちゃんの味方だよ！」

「曜ちゃん… ありがとう！」

そして、私は和くんの元に走っていった。

「和くくん!!」

あれ？返事してくれない…

やっぱり私のこと嫌いになったよね…

自分から突き放しておいて今さらなんだという話だ。

「和くん？」

今度は肩を叩いてみる。

すると和くんはこつちを向く。

え？泣いてるの？

「千歌？千歌だあゝ」

「え？うん！千歌だよ？」

泣きながら微笑んで私を抱きしめる。

この人、ほんとに千歌より年上だよね？

そんなことを思わせるくらい泣いていた。

「俺、千歌に嫌われたと思って……」

「ごめんね……和くん……」

私は曜ちゃんに話したように和くんにも説明した。

「そんなことがあったのか……気づいてやれなくてごめん……」

「なんで和くんが謝るの？悪いのは全部私で……」

「そうだな……俺に相談の1つもしないで勝手に怒って別れようとした千歌も悪い……けど、全部千歌に背負い込ませた俺の責任でもある……」

和くん……

喧嘩なんて小学生以来だから仲直りの仕方が分からない。

自分から始めたことなのに……

私やっぱりだめだめだ。

「なあ、千歌？どうして今話してくれたんだ？俺は今日の挨拶のされ方で本当に諦めようと思つてた。だからどうしても納得がいかないんだ。」

「本当は言うつもりなんてなかったよ。でもね、曜ちゃんに話したらそんな選択間違つてるって……それで思ったの……本当にこんなことがしたかったのかな？って……」

「そうか……じゃあまた俺と付き合ってくれる？千歌としたいこといっぱいあるんだ。」

まさかあんな最低なことしたのに和くんからまた付き合つてほしいなんて……

「もちろん！和くん！」

私は名前を呼びながら抱きついた。

それを彼は受け止めてくれる。

「た・だ・し！これから何が起こつてもずつと俺のそばを離れないこと！」

「うん！絶対絶対離れないから！和くん！何言われても！」

そういうと私はぎゅつと強く抱きしめた。

「それは…… ちょっと困るかなあ……」

そんなことを言いながら和くんも抱き締め返してくれる。

「じゃあ、帰ろっか！」

「そうだな！」

私たちは手を繋いで帰る。

曜ちゃん、ありがとう！

これからもずっと千歌の味方でいてね！

大好きだよ♡

こうしてやつと出来た曲は

“ My list to you!
私のリストをあなたへ…… ”

いつかこの想いが届きますように……

番外編

U A I 0 0 0 0 記念　くヤンデレ千歌つちく

最近、千歌の様子がおかしい。

気がつくといつも俺の隣に居るし、いつも以上にベタベタしてくる。

最初はそんなに気にしなかった。

付き合い始めて慣れてきたくらいにしか思わなかった。

でも……

「……　んん……　おはよっ！和君♪」

「……　んん……　おはよう。千歌。」

そう、昔は恥ずかしくて自分からキスしなかったのに……

これでも朝はマシな方なんだ。

「さあ、朝ぐ飯食べよー」

「お、おお。」

朝飯を食べ終わったあとが大変なんだ。

「おはようございませす！桜内梨子ですー！」

「おはヨーソロー！千歌ちゃん？」

そう。

この2人が来ると機嫌が悪くなる。

「おはよう。今日も来たんだね。」

今の意味は今日も私と和君の邪魔をしに来たんだねだろう。

何とも恐ろしいやつだ。

「もちろん！私は千歌ちゃんの友達だからね！」

「私も！」

曜、梨子。

そういう事じゃないんだよ……

「そっかー」

千歌、目が笑ってないぞ!?

「早くしないとバス行っちゃうよ！」

「うん…… 先行っててもいいよ」

「待ってるわ。」

今の意味は先に行ってろって事だよな

遠回しに怖い。

「ごめんな。いつも。」

「ううん。気にしないで。」

「慣れたものであります!」

「そうか...」

「ねえ。何してるの?」

「千歌!」

いつもこうだ。

気がついたら隣に居る。

それと同時に物凄い殺気を感じる。

「あつ!バス来たよ!」

「乗りましょ!」

俺が通っているのは『浦の星女学院』だ。それがどうしたって?

どうしたもこうしたも学校は元々女子校だから俺しか男子がいらないんだ。

すると必然的に話すのは女子になると言うことだ。

「おはよう!皆!」

「チャオ」

「おはよう。リトルデーモン」

バスにはもう果南、鞠莉、善子が乗っていた。

「鞠莉、珍しいな…… イダイイダイ」

「まあね。たまには…… 大丈夫？」

「ああ。」

千歌が腕をつねってきた。

物凄い力で……

「ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ」

「千歌？」

「何？」

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫。」

それからダイヤ、ルビィ、花丸と乗ってきてA Q O U R Sが揃った。

何を話しても千歌は怒る。

「じゃあ俺はどうしたらいいんだ？」

「誰とも話さない？ 出来るわけがない。」

「鈴木君、これやってくれる？」

「ああ。いいぞ。」

「鈴木先輩。これどうぞ!」

「ああ。あ、ありがとう。」

こうして長い長い1日が終わったと思った。

ここからが長かった。

「和君。今日は何人と話したのかな? 千歌はあれ程言ったよね? 誰とも話さないでつて」

「仕方ないだろ。」

「ふうん。仕方ないんだ。まあいいや。じゃあ今日貰ったもの出して?」

こいつ、なんで知ってるんだ?

「何でも分かるんだよ? 和君の事ならね♪」

こんな怖いセリフを放ちながら千歌の顔はにこにこしている。

千歌をこんなにしたのは俺なんだ。

だから、俺が何とかして元の千歌に戻す。

「全部か?」

「もちろん!」

「別に普通の物も?」

「ぜ・ん・ぶ・ね?」

俺は今日貰ったもの、全部出した。

クラスメートから頼まれたポスターの紙、後輩から貰った文房具、お菓子、手紙など……

「もう何も持っていない?」

「持っていない……です……」

「私、和君の事信じてるからね♪」

信じてるならこんな事辞めろよ!

そう突っ込んでやりたい……

でも下手すると俺の命がない……

「なんでこんな在接受取っちゃうのかな?なんでかな?あつ!私の愛が足りないのか!」

どうしてそっちの方向にしか思考が回らないのだろう。

「ちよつとく和君!助けて〜」

「今行く!」

この時、俺は知らなかった。

ヤンデレは怒らせると怖いことを……

千歌が助けを呼んだのは蔵からだった。

そこに入ると……

全身に電気が走る。

「ヴァ………ち、か………」

「作戦大成功!!これからずっと一緒だよ♡和君♡」

俺が目覚めるともう既に夜ほかった。

蔵が暗いからか？

ダジャレじゃないぞ？

冗談が言える状況じゃないのは一番俺がわかってる。

「あつ！おはよう。和君♡」

「千歌………」

「あれ？抵抗しないの？てつきりするのかと思った。まあ。無駄だけどね。」

俺の手には手錠がしてある。

そしてご丁寧に足枷まで。

「千歌。何がしたいんだ？」

「ん〜和君が私の言うことを効かないからお仕置き？」

「お仕置きね……………俺がいつ言うことを効かなかったって？」

「いつ？いつも何もいつもだよ！いい加減にしてよ！千歌はね……………千歌は……………」

今にも泣き出しそうになる千歌。

さつきまでの勢いはどこに行ったんだ？

情緒不安定だな。

「千歌はね、和君が思ってるよりいい子じゃないんだよ？和君が他の女の子と一緒に居

たら嫉妬するし、殺したくなっちゃうだよ？辛いんだから……………」

そうか……………」

俺は千歌を不安にして……………」

最低だ。

なのに、俺が全部悪いのに千歌を避けて……………」

「だからね？和君を殺して私も死ぬの!!」

「おい！千歌！落ち着け！」

「和君が千歌だけを愛してくれないからいけないんだよ？」

「じゃあ俺が千歌だけを愛したらずっと千歌の傍から離れなかったら……」

「そんな事ある訳ない!!和君は隙があれば違う女の所に行くのに……」

だいぶ拗れてんな。

「俺が!!千歌を愛すから!誰も傷つけるな!!」

「……………分かったよ……………」

「千歌!」

ようやく分かってくれた。

そう。思った。だけど……

世の中はいや、千歌の中はそんなに甘くなかった。

「うふふつ……天国で千歌をずっとずっと愛してね?」

「グア……………ち……か……」

グサツと包丁が思ったより深く刺さった。

刺された腹からは大量の血が……

「もう少しだよ!頑張つて!!千歌は和君が行ったらこの薬飲んで後を追っかけるからね

♡」

「こうして俺は意識を失った。

「……………く……………ん……………」

何かが聞こえる。

「か……………く……………ん」

「か、ず……………君!!」

千歌か?

「和君!!」

目を開けると千歌が……………

「大丈夫?」

よく自分であんな事しておいて言えるわ……………大丈夫?大丈夫な理由ないじゃない

か……………殺されかけたんだぞ?

「結構魔されてたけど?」

うなされてた?

それって……………

夢だった?!

「夢……………か……………」

「本当に大丈夫?!!」

「ああ。大丈夫。」

「早く良くなつてね!!」

本当に夢だったんだな……

千歌はいつもの状態に戻っている。
良かった良かった。

(和君、ずっと千歌を愛してね)